都名所圖會

平安城

再刻

2

Description of the Famous Places in Kioto the former Capital in Japan up to 1868 – and of the Productions.

Churches.

Temples.

Festivals
Ceremonies
History connected with each Place.

都名所圖會巻之二目録

平安城尾

官者殿祭　祇園御旅所　四條道場金蓮寺　十住心院（染殿地藏）
大雲院　祇園會鉾圖　同山鉾圖　手洗水圖
座頭積塔　四條河原夕涼圖　同芝居　目疾地藏
宮川（鴨川の末也）　建仁禅寺　蛭子社　六道珍皇寺
六波羅蜜寺　姿見の池　阿古屋塚　焔魔堂
愛宕寺　晴明社　十禅寺社　若宮八幡
五條橋　首途八幡　御影堂　鏡の池
塩竈井　本覚寺　塩竈山上徳寺　塩竈社
太子堂　新善光寺　蓮光寺　長講堂
萬年寺天満宮　竹林院　鬼頭天皇　等善寺
橘行平卿塚　市中山金光寺　延壽寺　夕顔塚

籠の池
藍染川
花園稲荷社
俵成卿社

佛光寺
神明宮
大原社
白天神

因幡薬師
繁昌社
朝日宮
神明宮

諏訪社
新玉津島社
菅大臣社
五条天神宮

一音寺
壬生寺
同狂言圖
蛭子森

新住吉
荒神社
化粧水
枚嫗子

天道社
御太刀松
石上宮
更雀寺

本國寺　加藤清正墳
人丸社
醒井
西本願寺

古醒井
興正寺
常樂寺
東本願寺

東殿
松明殿
稲荷祭礼圖
金光寺

成真寺
判官塚
宇賀社
藪内紹智家

芹根水
月見橋
稲荷社
不動堂

道祖神
稲荷御旅所
蔵王森
寛算石

春日森
古御旅
朱雀長者
粟嶋社

古井社
清盛旧地
住吉社
東寺

三鈷松
松子坊松
羅生門旧跡
大通寺

六孫王社
誕生水
満仲公誕生地
歓喜森

福大明神森
人丸塚
島原傾城町

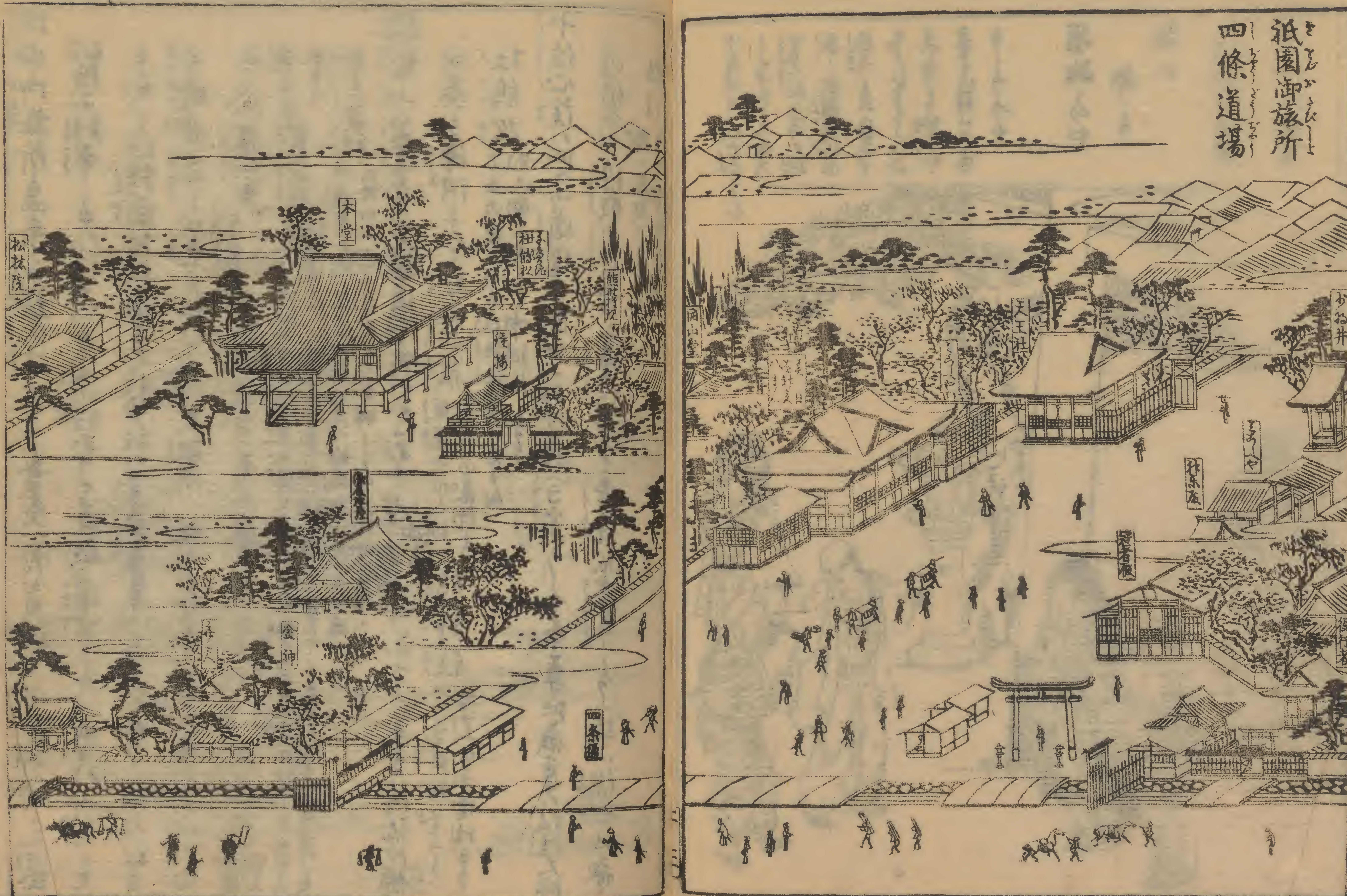
十月廿日ハ誓文払ひ
とて四条京極乃
冠者殿ニ詣て群
集し祇園鴨川の
遊女もこゝに来て
ちかひをそゝくみな
其夜より誓文を
立ても此神ハ受ぬ
なりけりや

嘘なしや
都を
酒の
ゑひとを誅

其角



祇園御旅所 四條道場



大雲院



祇園御旅所ハ四条京極の辻にあり毎年六月七日祇園會の神輿三基此所に神幸し同十四日に祭禮ありて本殿へ還幸し給ふ両日の山鉾ことごとく此神前を引渡す北の社ハ素戔嗚尊八王子をまつる南の社ハ少将井天王を祭る初め一坐ハ大政所と號して むかしハ烏丸通五条坊門の南に御旅所有 今大政所町といふ 少将井の一坐ハ烏丸二條の北にあり 今少将井町といふ

三坐の社 天照太神 八幡大神 春日明神

官者殿 祭る所の神ハ世に土佐坊正尊の霊なるといふ今なるハ大誓文拂の神として十月廿日の 蛭子講には人群参して賣買の神と素戔嗚尊の中に坐ますとて拂遣ひて

悪王子社 御旅町の北側にあり 祇園會の神輿臨幸の時烏丸通 又錦の小路悪王子町より古例によりて神供を備ふ

錦綾山金蓮寺ハ京極通四条の北にあり 四条道場と號す 時宗にして本尊ハ阿弥陀佛 開基ハ浄阿上人なり 親鸞地蔵 運慶の作なり 初ハ鳥辺野の墓所にあり

熊野社 當寺の鎮守なり 時宗の守護神なり

杜鵑松 方丈の東にあり 杜鵑洛陽に来る時ハ先此樹に至りて初音を啼くとなり

十住心院ハ四条道場の南口にあり真言宗にして本尊地蔵尊ハ弘法大師の作なり染殿皇后常に尊信ありて當院を建立し給ふ故に染殿地蔵と称す 額ハ染殿と書して 僧正賢賀の筆なり

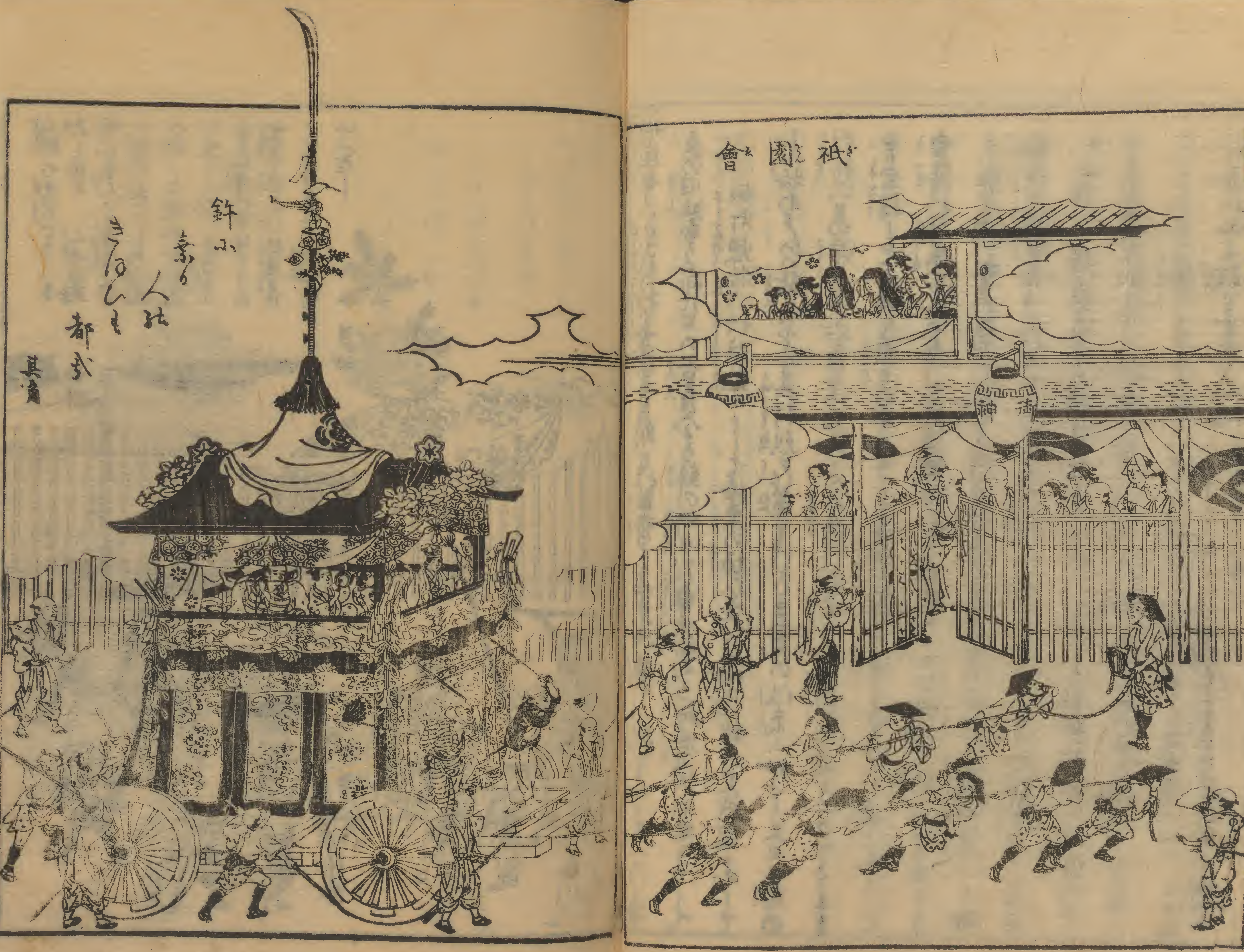
龍池山大雲院ハ京極四条の南にあり浄土宗にして智恩院に屬す本尊阿
弥陀佛ハ恵心僧都の作なり開基ハ貞安上人なり此人ハ安土論の時浄家の宗
老にして信長公厚く帰依しましゝに別に八幡山西光寺を建立して貞安にあたへられ
住職せし時に信長公御父子明智光秀が為に生害しぬ貞安上人悼ミて
急ぎ京都より登り二条烏丸の御所に至り室城へかけ入まゐらせて菩提を弔ひ其後
秀吉公の命によりて天正の末に織田信忠郷追福のため當院を草創しけり公
郷の法名を大雲院殿三品羽林仙巌居士と称し當院の號とせり信忠公の御霊向ひ所にあり
信長公安土に御在城の時貞安上人に七種の寄物を賜る今當院の什寶とす其中
に法然上人の一枚起請文あり是ハ一休和尚の筆なり奥に繪讃あり圖ハ達磨大師
の後向の画なり其讃に曰

達磨悟りくらりとしてきたりけり胸に何かと
なんでもりもうれあらうかの郭
九年までせざしまうするもあたらいの御弥陀の一聲

御作者

一休判

祇園會の祭式ハ例年五月朔日の致齋より四条御旅町に榊をたつる是一乃華
表の旧地なり同廿日の吉符入より鉾の町々にハ囃子初あり神輿洗ハ同晦日にして
御迎挑灯煉物の行粧艶々として洛東の賑ひ又六月朔日ハ鉾の児祇園社に参て
乗物あるひハ騎馬にて其行烈花麗をつくし高貴の往来に似たり五日ハ鉾の
引初六日の早天より六角堂におゐて山鉾行烈の前後の鬮取あり此日の夕がたより宵
宮錺して山鉾を祭日のごとくかざりて提灯をともし連て夜ふくるまで囃子ありて
貴賤の群集いふ方なし七日ハ祇園會にして卯の刻より山鉾列を乱し四条通より
京極を南へ松原より西へ引渡しぬ此日神輿の祭礼ハ未の刻にして感神院より御
旅所へ神幸あり又八日よりハ十四日の山鉾の営ありて十二日の鬮取あり十四日
の山鉾ハ三條通を東へ京極を南へ四条より西に引渡しぬ神輿の祭式ハ御旅所より
四条より西へ東洞院より神輿ハ南に引別れて渡りなし三條より西又旅社にて同じく
三条より東へ還幸しぬ同十八日にハ御輿洗にて晦日に等し祇園鴨川のかうりれ
竹葉の如く群をなせり　山鉾の図ハ二三を挙るも全図例祭古実の次第ハ祇園會細記に
くハしきゆへここに略ス



祇園會
鉾にのる人のきほひも都哉
其角

山鉾は延式にあらしへと
名も異みして山崎の定
鉾大舎人の笠鷺鉾所々
の跳鉾家々の笠車風流
の造り山八撥曲舞など
ありて荘も麗微なり
今は和漢の錦繍をまとひ
七宝を鏤め行粧厳麗に
して天下第一の壮観とも
いふべし



家集
いさゝんに
山高れ尾の
長き日は
神の園よぞ
ちよふるらん
為家



手洗水ハ烏丸通錦小路にありむかし太政所町に祇園神輿乃御旅所ありしよれ糸諸の輦こゝにて手洗ありし名此劔よかり



今も六月七日より十四日まで井坂此ところを手水所とこゝろえ凄冷より清泉にて此都るかし此水を服すれハ疫病のがるゝとぞ

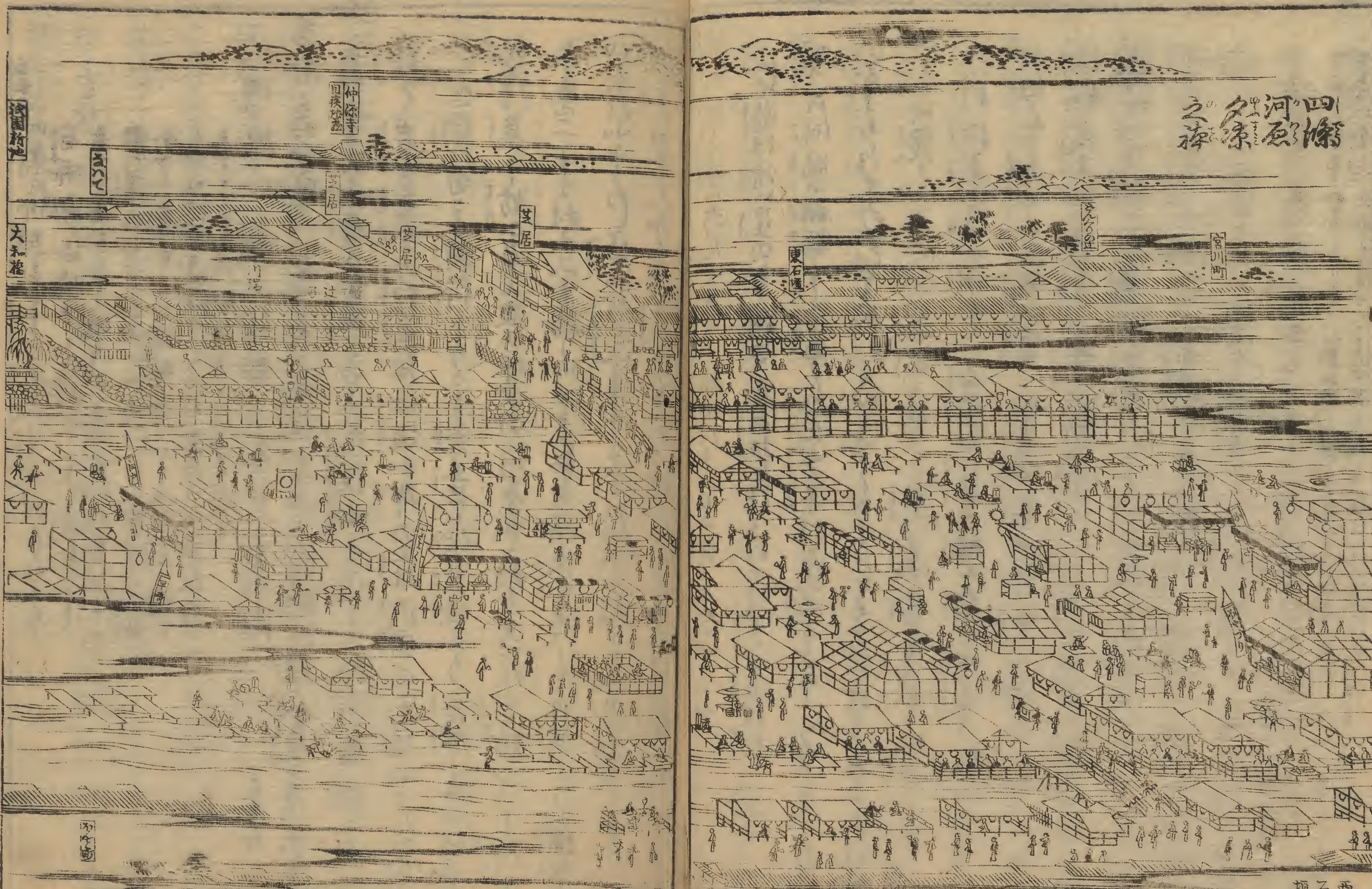


座頭積塔といふハ人王五十八代光孝天皇の姫宮雨夜内親王御眼盲目にして洛中の女の盲目者を愛して御伽をせさせ給ひし賤きものハ官をたまはり御前に任ぜられしハ御おぼへといひ風儀ありてこれより男子の盲人も官を得るを座頭と称じ撿挍勾當の官をゆるされ此内親王よりの遺風なり毎歳二月十六日ハ此姫宮の御祥忌なれバ座頭集会をなして尊親を拝し東の河原に出て石を積で報恩をなすを積塔といふ又六月廿四日にも集会をなすこれを座頭の納涼といふこれも則御弔なりといふ今ハ高倉通五條坊門の北に集会所ありて二箇の積塔ともに会しまく琵琶を弾じて平家をうたふ事旧例をもつて此法甚だ勤るなり又雨夜内親王ハ盲ひ給ひしゆへ後ハ凍餒のうれへなからん為に不便に思ぼしめされ洛陽の左女牛に長屋を立て住しめ給ふ今京童のあざけりにあめうじ光くらうじ杖にかゝつて通するといふハ此左女牛の目くらといふありしとや

雨夜内親王の御事王代の秘記にも見えず後考あるべし

四條河原夕涼ハ六月七日より始て同十八日に終る東西の青楼よりハ川原へ床を儲け燈ハ星の如く河原にハ床机をならべて流れに宴を催し濃茶の帽子ハ河風に翩翻として色をあらそひ美少年の月のかほばせハ扇のかぜにかほりてみやびやかなれバなかなかいふべくもあらず妓婦の今を盛といろどりて芙蓉も及ばざる粧ひハ蘭麝のにほひやかに薫て南へ行北へ行滝茶の店に休らへバ山崎の花香に酥を醒し香煎にハ鴨川の流れを汲んで京の名の軽を賞しかる口咄ハ晋の郭象にも勝まて懸河の水を注が如し物まねハ幽谷にも抑しぬる猿狂言なかのすまひハ曲馬曲枕麒麟の縄渡ハ鞦韆の伎かして嗩吶の声をよびさかんなれ店よりハ瀧水滔々と流て暑を避硝子の音ハ珊々と磨して涼風をまねく和漢の名鳥深山の猛獣まであつまりて観人の群をなして川辺の遊興するも祇園御祓川の例あつて小鵜かひ群を退散し牛頭天皇の蘇民将来に教給ふ八坂の遺法なるべし

昔大内裏の時ハ群臣一同ニ朱雀門にあつまりて此祓ありしとぞ四季ごとに相生して造化あるゆへ相好せんとて悪気の鋭気を駆するなり


四條河原夕涼之躰
祇園新地
大和橋
仲源寺
目疾地蔵
芝居
芝居
芝居
川端
東石垣
宮川町
西石垣

四条の川原すゞみとて夕月夜のころより有明過る頃まで川中に床をならべて夜すがら酒のみものくひあそぶ女は帯のむすびめいかめしく男は羽織ながう着なして法師老人ともに交り桶やかぢやの弟子子までいとまえがほにうたひのゝしるさすがに都のけしきなるべし

川風や薄かき着たる夕すゞみ

芝居は四条鴨川の東にあり永禄年中に江州の浪人名古屋三左衛門といふもの出雲のお国といへる風流女とくらしひそかに歌舞妓と名づけて男女立合の狂言を仕組小袮の森林祇園の南林にあらはし又四条河原橋の西にて興行しけるに秀吉公伏見の城より上洛しあまた見物群集し坊に及ぶ故に四条の河原より河を東に渡し中絶ありし所に慶長二年に村山又兵衛といふもの四条河原中島にて再興し又縄手四条の小芝居も遂に寛文年中に今の地にうつして常芝居となる

仲源寺は四条大和大路の巽の角にあり浄土宗にして智恩院に属す本尊地蔵菩薩は土中出現の尊像なり一説に定朝の作なりとぞ世の人目疾地蔵と称す眼病平愈の祈願をかくれば霊験あり実は雨止地蔵之往来の人驟雨の時此堂に宿りしとぞ脇士に恵心僧都の作なる阿弥陀仏は南の方に安置す丑日の作の千手観音は北の方に置く薬師仏は方丈に安置す弘法大師の作なりとぞ

宮川といふは鴨川四条より南の別号なりむかしは爰に禹王の廟あり（洪水を鎮る故之）後世人家建續て町の名となれり

東山建仁禅寺は大和大路四条の南にあり（門前通四条より南を建仁寺町と云ふ中の門の南より作道とぞ称す代々の里坂建仁寺垣と云ふ）五山の第三位にして開基は千光国師葉上僧正諱は栄西といふ姓は備中国吉備津の人にして賀陽氏也薩別の刺史貞政の曽孫なり建保三年七月五日寂す七十五歳土御門院の勅願にして征夷将軍源頼家卿数地を寄附しおはんぬ建仁二年伽藍ことごとく造営し勅願所となり年号を以て寺号とす仏殿の本尊は釈迦仏脇士は迦葉阿難なり開山塔を興禅護国院と号して東の丘にあり栄西国師の廟塔なり又国師字本国す



建仁寺
焼香橋
方丈
方丈
仏殿



帰朝の時携へかへし菩提樹ハ当院にあり今繁茂して河原院の跡ハ佛殿の北
に二ッの鐘堂あり東の大鐘ハ昔融大臣上ハ塩河原に殿舎を建ならべ後に佛
閣となし河原院と号す此所にありし鐘也荒廃の後鴨川七条の南の深淵
に沈む栄西国師是を窺知りて官吏に許を求て当寺に揚るに此鐘深淵
引上るに更に動かず於是国師のひとりにて力者の音頭にて栄西と唱へ国
師の弟子長首座と呼んで引上しと数多の力者大勢是を負荷してやすく
当寺に引きたりとそ 今重き物を引上る時名を呼で運送するハ此所謂るなり又鴨川七条の南一町に金が淵といふあり此鐘の沈ありし所也実ハ鐘が淵なり
又此鐘毎夜子の時より数九十聲撞て晨鐘より十八聲と合て百八撞之音ハ陀羅
尼経を誦して撞しゆへ此鐘を称して建仁寺の陀羅尼といふ池を法水池と
号し中門を矢立門と呼ぶ 平家の一門の脇教盛卿の門なりといへり 禅居庵にハ摩利支天を安
置す嘉暦二年唐土より将来せし霊像也 応験新にして常に詣人多し 妙徳石 方丈の北にあり 焼香橋 浴室の北にあり
の石橋 楽神廟も国師の勧請にして当山の鎮守也 備中吉備津宮の神を勧請なるなり
安国寺塔 方丈より巽にあり 織田有楽塔 正伝院にあり 則有楽翁の墓あり


六道
珍皇寺


六波羅蜜寺
本堂
阿古屋塚
弁天社

蛭子社ハ建仁寺門前にありて祭る所蛭子命崇西國師勧請したまふなり

建仁寺境内の鎮守

神事ハ九月十六日

普門山念佛寺ハ六波羅密寺の西にあり むかしハ此邊を愛宕里といふ今此号ハ當寺によりて世人愛宕寺と称す

真言宗にして開基ハ弘法大師中興ハ千観内供なり本尊観世音千観の作

なり左右の脇士ハ毘沙門地蔵尊千観内供ハ自作の像を安置す俗姓ハ橘氏

相州の刺史中納言頼顕卿の子也幼名ハ千観丸といふ成長して叡山運照

内供の室に入て出家し顕密の碩学なりき一世の間常に六字の佛號を

修ずる事止事なし故に念佛上人と呼ぶ又堂内に地蔵尊を安置す此

像を火伏地蔵と称じて毎年正月二日經を讀て諸人火伏の札を受る

又天狗宴と称る車寄松 千観内供此所にて車より降て往来し 此松に車を寄しとぞ

普陀洛山六波羅密寺ハ六道の西にあり真言宗にして智積院に属す本尊

十一面観音ハ立像長三尺空也上人の作也 西國十七番札所又洛陽観音巡の其一なり 傳へ曰

村上帝御宇天暦五年に疫病時行て死する者数多し空也上人今の本尊

憐み十一面観音の像を作りて車に乗せ洛中を自ら牽ありくかの八日ハ當寺

本尊之観音に供ずる典茶を疫人にあたへけれバ一同に平愈す村上帝これを

叡感して吉例として毎歳元三に服したまふ万民今に此例を行ひて名を王服と

號し年中の疫を免るゝといへり北の方ハ地蔵尊を安置す いにしへハ此尊の像を本尊として六波羅の地蔵堂

と号す康頼の寶物集に曰東山に貧しき女ありけり年来此地蔵を信じける此女に[illegible]

よりける[illegible]死してたらいかゞして葬んと案じ煩ひ居たりける[illegible]

乃僧来りて出来て何やらんみゆくハ[illegible]問ければ事の子細をありのまゝにかたり

なる僧来りて[illegible]家見苦しくさらるゝを[illegible]しくしと[illegible]背に[illegible]

ひておくり其邊[illegible]此女[illegible]しさらずかりかしきれハ[illegible]六波羅の地蔵の

為[illegible]とぞ参りて拝しまゐらすれハ地蔵の御足に土おほくつきてありし[illegible]

まゐりして此地蔵をば山をくりの地蔵とも[illegible]老母の鬘を掛て居[illegible]

かけの地蔵とも号しける

南の方ハ薬師佛を安置す傳教大師の作也開山堂ハ空也上人自作

の像あり姿見の池ハ上人ここにて姿をうつし自像をきざみ給ふとぞ

阿古屋塚 本堂の北にあり又条坂の北に女阿古屋が塚と上にあり 無縫の石塔并に大のやしろあり 空也上人いせたる袖ハ文殊経の上に袖屋よりけさうたる御聲にて

弥陀こそのむかしの空しくなりて今ハ我此里の神といへるし

上人あれほとけて
世の中ハとく暮ぬるの雨やどりつかの宿ハ来世なりけり　空也上人
拾遺
一聲も南無あミだ佛といふ人の蓮のうへにのぼらぬハなし　仝

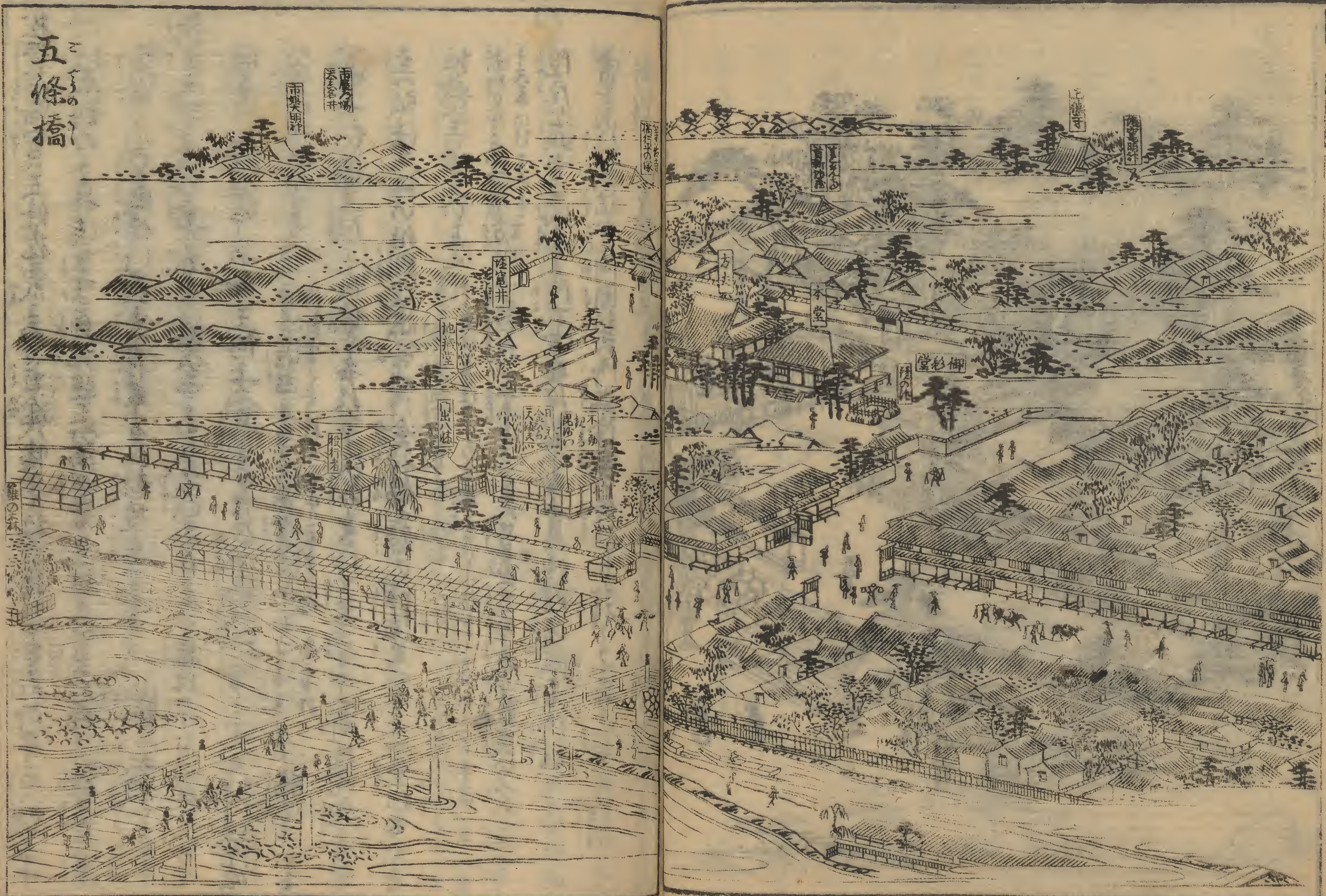
珍皇寺ハ建仁寺の南松原通にあり　六道と号す　本尊薬師佛ハ伝教大師の作にて開基ハ慶俊僧都中興ハ弘法大師　篁堂にハ小野篁の像を安置す　此所冥土へ通ふ道なりとぞ　焔魔堂ハ東北方にあり　迎鐘ハ七月九日十日参詣の人此鐘を撞て聖霊を迎しむるなり　六道辻　前にあり　本堂の　当寺ハ久代平安城の葬所なり　桓武天皇延暦十三年に長岡より此京にうつし給ふ時此所を諸人の葬所と定められし由遷都記にみえたり　又愛宕ともいふ　源氏物語に桐壺の更衣を愛宕といふ所にて葬てあるハ此寺なり　いふあたごとハ此所の東にあり　河海抄にハ弘法大師の聖跡として東寺の長者管領しけるとなり　今ハ建仁寺の塔頭大昌院此寺を兼帯所とするなり

北斗堂ハ六道の東弐町斗北にあり　北辰妙見を安置す　高燈籠をかゝげたり　城南淀川の通船運送の目当に常夜燈をかゝげしハ熊野の謡曲にも北斗ハ星の曇なきと謳ひしハ応仁の兵火にかゝり　一年金森宗和江府より上洛の時寄附して此灯籠の倒れて苔に埋しを寺僧にあたへて再興の助とせしとなり

晴明社ハ宮川町の東松原の北にあり　古ハ此地に安倍の晴明の塚ありしが新道の人家次第に及んで次第に塚崩れ平地となる故に古へ社を建て其霊をまつる
十禅師社ハ晴明社の南にあり　むかしハ境地広くして樹林森々たり　牛若丸此林にて千人斬ありしに武蔵坊弁慶も此神の前にて主従の約をなせしとなり
若宮八幡ハ五条橋東五町にあり　祭る所石清水と同神也　初ハ六条佐女牛にあり　故に佐女牛八幡と号す　例祭ハ八月十五日放生会あり　旧地ハ若宮通六条下る町今の東本願寺の裏に小社あり　六条佐女牛ありしを天正年中に此所にうつす
五条橋ハ初ハ松原通にあり　則いにしへの五条通也　秀吉公の時此所にうつさる
五条橋通より東ハ実ハ六条坊門也　欄干に紫銅擬宝珠左右に十六本ありて北の方西より四ッ目に橋の銘あり　雒陽五条石橋正保二年乙酉十一月吉日
奉行　芦浦観音寺舜興
小川藤左衛門尉正長
此橋上より東を見れバ洛東の勝地木の間くに顕れて平安の佳景あまねく見ゆる
蒲団着て寝たるすがたや東山　嵐雪



若宮八幡
本社
いせ両宮
春日社
天満宮
神楽所
秋葉社
放生池


五條橋
方丈
本堂
御影堂

松豊八幡宮は五條橋西にあり首途八幡とも称す清和天皇の御宇貞観年中の草創なり其後白河王子貞純親王の御霊を祭り親王の息六孫王経基公尊崇ありて宮殿楼門巍重に再建せしむ封境広大なり 外封凡十二門ありしとかや平清盛の代滅亡しておとろふる

新善光寺御影堂は首途八幡の西にあり久代に長寿年中権林寺の建立にして開基は弘法大師也中興王阿上人真言宗を改て時宗にしてる本尊阿弥陀仏は安阿弥の作なり 初の本尊は信濃善光寺の如来をうつし作りて本尊とし故に御影堂と号す今坊中若干之処に安置す 脇壇にま一遍上人の像王阿上人の像を安す方丈の本尊は一光三尊にして阿弥陀観音勢至は弘法大師の作則嵯峨帝の御念持仏之鏡の御堂寵は井は本堂の東にあり地蔵堂は方丈の東に 当寺始は東洞院春日にあり権林寺の別所にして尼寺なり永安年中に炎上す東河原院にうつる應永廿八年佐女牛室町の北に引享禄二年五条新町の北にうつる又天正十九年此地にうつる

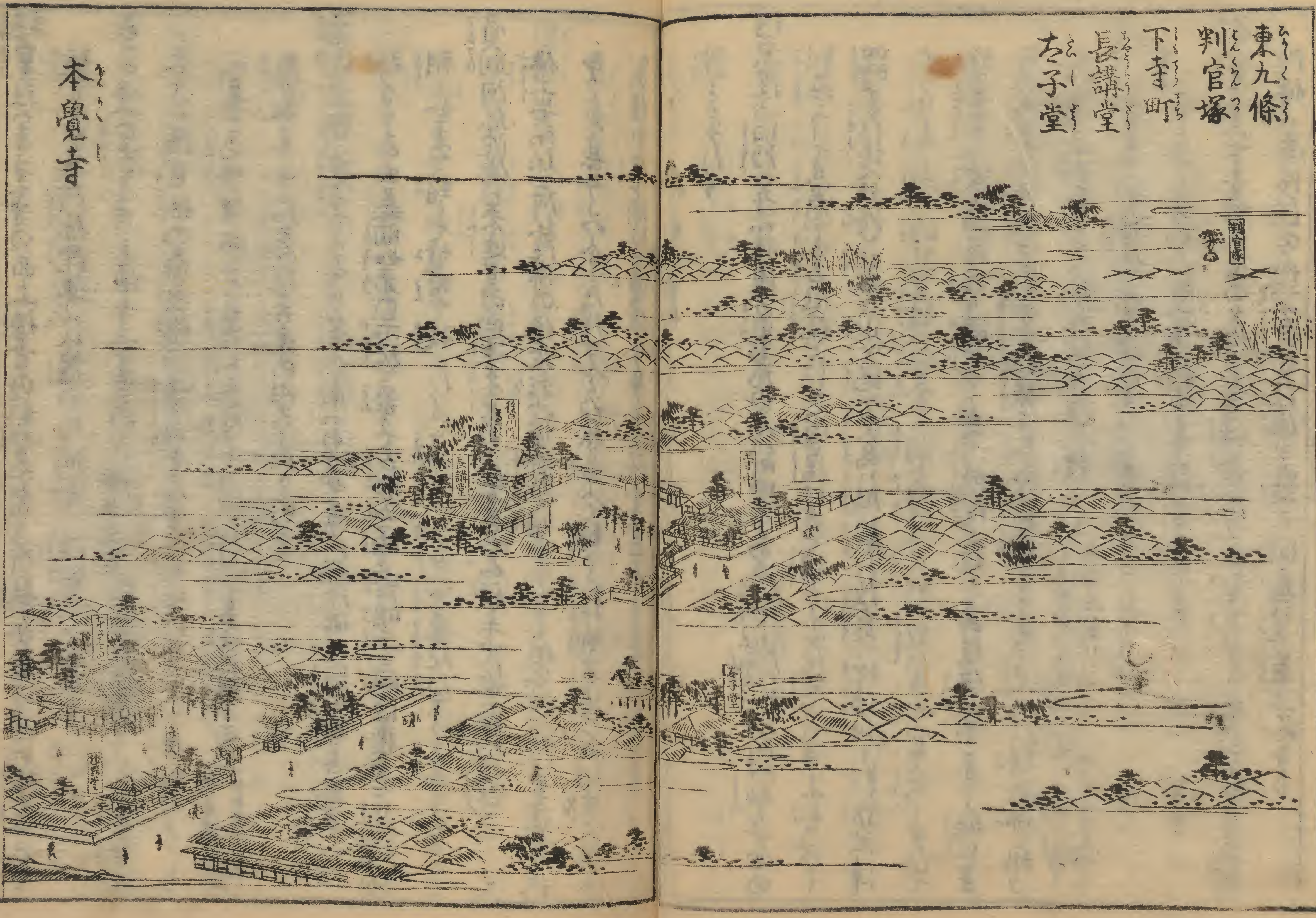
坊中に扇を折て業とするもの昔より多し本寺中に敦盛の室蓮華院尼公此寺に閑居し阿古女扇を製しはじめて其頃後嵯峨帝御悩ありて頭は當寺の住職祐覚阿闍梨は御悩除滅の修法を加持し又扇に呪文を封じ納して帝に上れば即御平癒あり依て帝悦びましまし皇子の御所を当寺に再興し御影堂の王阿上人と号しける扇は古例によりて世々名物とあり高貴の献とし都鄙の賞翫となれり

河原院の旧跡は五條橋通万里小路の東八町四方なり 鴨川の水を殿舎の庭中を流し池を構え其所は融左大臣の別荘にして臺閣水石風流をつくし遊蕩の美を擅にし山水の築は草木顕然とし四時に花絶ず池を鑿て水を湛へ魚鳥は波に戯れ陸奥の松島をうつし塩浦塩津より日毎に潮を汲せ管絃は仙臺に調文籍は月殿に翫びあまた遊宴しあそびて後寛平法皇此勝地に遊覧し東六條院と號す其後仏閣となし融公第三の御子祇陀林寺の本主仁康上人として知識をとゞめて丈六の釈迦仏を作りて此院に安置しまり後河原院と號しける 今五条橋の南鴨川高瀬川の間に森あり籬の森といふ河原院の生垣と

古今
君まさで煙絶にし塩竈の浦さびしくも見え渡るかな　貫之

続後拾
塩竈にいつか来にけん朝なぎに釣する舟はこゝによらなん　業平

本覚寺は下寺町五条の角にあり浄土宗にして知恩院に属す本尊阿弥陀仏は安阿弥の作一名は如法仏と號す開基は玉翁上人なり


東九條
判官塚
下寺町
長講堂
左子堂
本覺寺
判官塚
寺中
長講堂

塩竈社ハ本覚寺の西上徳寺の鎮守なり所融左大臣にして則塩竈なと
號すと本尊阿弥陀佛ハ八幡の作開基ハ傳誉上人なり
太子堂白毫寺ハ上徳寺の南にあり 速成就院 宗旨ハ律宗にして本尊ハ聖徳
太子ハ御自作の南無佛の像長二尺余脇壇の四天王ハ唐作なりとそ
開基ハ忍性律師にて舊ハ知恩院中門の北浩玄院の後にあり 今其地に古井ありさめか水と號す
慶長年中知恩院再建の時こゝにうつれりと
来迎堂新善光寺ハ本覚寺の南にあり本尊阿弥陀佛ハ信濃國善光寺と同一
躰なり本田義助如来の示現を蒙りて百済国の琢り斉明王の閻浮檀金一斤を得て故
朝し如来を鋳んとて爐壇を構へけれハ其光中より分身の尊像現れ出てけるの本尊是
なり
賀別阿弥陀佛ハ来迎堂の南蓮光寺にあり此本尊ハ元禄年中に東國の僧都ふあとりて
佛工安阿弥に阿弥陀佛の像を彫らしむ像成就し帰らんとする時安阿弥此尊像を希代
のものと甚惜しみ今一度拝せんと跡を慕ひて越るに山科郷にて追つき此よしを語れ
ハ僧則笈を開けるに尊像分身して二躰となる二人ともに其異なるをふしぎとおもひ一躰をとゝ
東西に別りて別れ其地を今も山科の賀別といふ安阿弥ハ賀帰しその像を當寺に本尊とす
馬止地藏 當寺にありむかし小松の内大臣重盛の作なりし像土中に埋れしを平清盛騎馬にて通りける途に止て進まれざりしかは掘らしむるにこの像出現せりとより六条河原の斬罪の場にありしといふ
後白河法皇の宸影ハ来迎堂の西長講堂にあり當寺ハ法皇の御建立にして時々御
幸ありて貴賤と論せず叡聞に達する亡魂を名帖に記しありて常に御回向ありて御修
を修しあるゆへ所々故に長講と称す 平家物語に曰されバ後白川法皇の長講堂の過去帳にも妓王
妓女佛刀自等が尊霊と四人一所に入られたり
萬年寺の天満宮ハ長講堂の南にあり初ハ間之町万年寺通の南にありしを
鬼頭天皇ハ本覚寺の東南竹林院の堂内にあり 正安二年のころ僧伏見院小山に流罪あり
小の官女をみて初連理の契をむすび又まさに製して八重姫を要に嫁ぐ[illegible]面る看らめ々の重清供奉し朝夕
重清其ハ仏菩提を種とし出家を遂記係かに鬼物へ志切にて僧の結び苦楽坊と號し水食を断ちて死すを
しして居らりしかば[illegible]疫病おかりけて苦悩を時の朝廷のわか亡魂鬼女と現し苦楽坊の頭を掻きれバ
怨平愈ことは功德ありて共に念佛し末代其證として頭をのこし鬼頭天皇と號しける
播行平卿塚ハ竹林院の南宝寺若寺にあり
市中山金光寺ハ時宗にして本尊ハ阿弥陀佛ハ定朝の作開基ハ空也上人なり 初は堀川七条の
ほとりにあり今の
本願寺境内にありしむかし此地の買人の 市比賣社 當寺にあり此ほとの産神 天真井 本堂の西にあり
市場をかふより市屋又は場ともいふ 祭ハ八月十二日 洛陽の名水之
延壽寺ハ金光寺の南にあり本尊ハ大日釋迦弥陀三尊にて銅佛定朝の作之 初ハ油小路五条にありしを今金仏町と云

夕顔塚ハ五条にあり
今ハ堺町松原の北にあり
源氏物語にある夕
かほのあり此所に住
たまひし給へり

新古今
夕の花をよめる　前右政大臣
白露のなさけをきたることのはやほのくみへし夕顔の花



籬の池ハ高倉五條の南宗仙寺の堂前にある井をいふ舊河原院の封境にして本堂の額ハ正水寺とぞ
真遺跡なり當寺ハ曹洞宗にして開基ハ大江和尚也　寺も河原院の舊跡といひ傳ふ
藍染川ハ五条高倉坂経て間之町より人家の下を南へ流て濁水なり
花開稲荷社ハ松原通高倉の西にあり稲荷町といふ　此所ハ松永貞徳翁が居所にして
俳書御傘坂撰を
古宅立春といへる坂五条花開の家よていつるそ

承集
おのかゝら洛坂門の松よみそおれたる宿は春よあかくの那　貞徳

五条花開の宿よ會していよ夕良坂
小車はやさのしかちと名ふしゆへてここかと我よ夕顔の花　仝

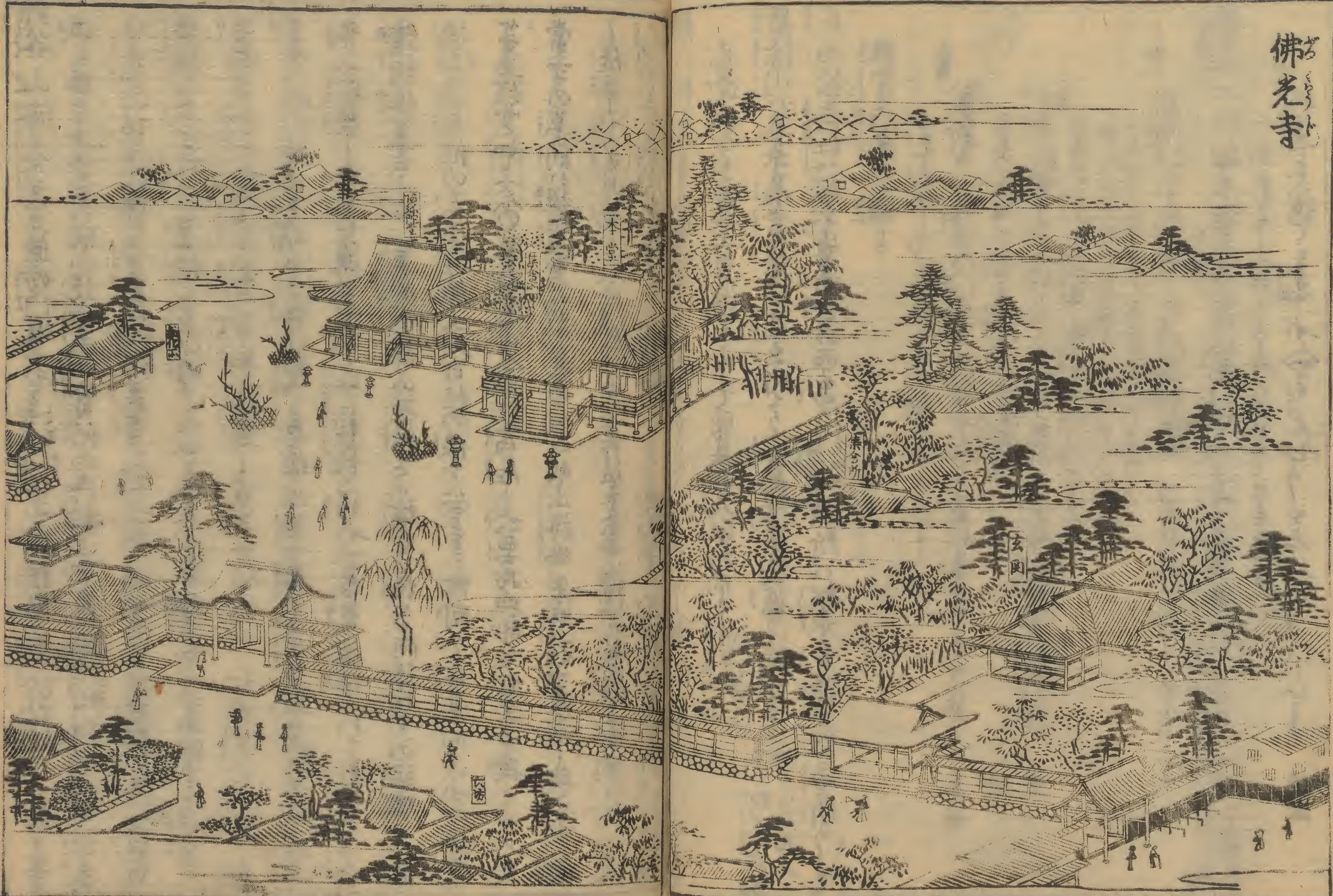
又条の宿にて夢想　稲荷の社北になる
ある人の此花さんの陰よきて此所むかし花をとくとくといひ傳へめとこあなのむかしくなつて

萬代とこれのやしろは春秋ハ花さそこのれてしれそ　みちら

俊成卿の社ハ松原通烏丸の南人家の後にありむかし所五條三位俊成卿の靈を祀て此所ハ卿の宅地なりとぞ
千載集えらひ侍りける時うたへてのあをみて

新古今
行末を我さも思ふ人やあらんむかしをしのふ心ならひに　俊成

佛光寺（ぶつくわうじ）



汁谷山佛光寺は五條坊門通にあり（初は興正寺と号す）宗旨は親鸞聖人の弘法にして佛光寺派と称す本堂には開山親鸞聖人自作の御影を安置す（長三尺）阿弥陀堂には當寺の本尊阿弥陀佛を安置す（長三尺一寸八歩）慈覚大師の作也此本尊は後醍醐天皇の御宇に盗賊寺内に乱入し尊像を奪ひ逃るといへども重くして持かたく一条河原に捨置て去ぬ其夜より瑞光を放て帝闕を映照し百官おそれおのゝく帝其の故をたづねさせ給ふに弥陀の光明なり勅使驚て尊像を帝に奉る宮中に安置す其後興正寺に遷座し寺号を佛光寺と改て勅額を賜ふ又叡慮に感ぜられて親鸞聖人の絵詞伝を書しめ給ひ専修念佛の棟梁たる綸旨を賜ふ阿弥陀堂の脇壇には聖徳太子の自作の木像法然上人自作の像を安置す餘間に存覚向に本願寺第三代覚如上人の息存覚上人是にて寓居し六要抄四部九帖等を撰し給ふ又當寺の草創は親鸞聖人四十歳の時山科郷東野村に建立し興正寺と號し徒弟の上足真佛上人に附属し給ふ其後五条西洞院九條殿下兼実公の別荘花園殿を聖人にたまひ附して花園院と号し興正寺の院號とせり（九十四代の帝花園院の御殿の跡）號す後醍醐帝の御宇元應元年に當寺を以て今此叡竹中汁谷に移を改む東は阿弥陀峯を限り西は柳原に至り（今は七条河原）南は菅谷を限り北は汁谷大路に至る其後足利尊氏公の祈願寺として佛供田を寄附し給ふ又足利家の宗門繁昌し尊信して僧俗諸国に充満し塔頭四十八坊にて及べり然るに文明年中當寺十四世の住職経豪上人は山科本願寺蓮如上人に属し寺僧四十二坊其外国々の門徒数輩随順を故に経豪上人は舎弟経誉上人當寺の住職として十四世を相続す（所在の六坊今寺内にあり）秀吉公の時大佛殿建立にかゝりて此地に移さる

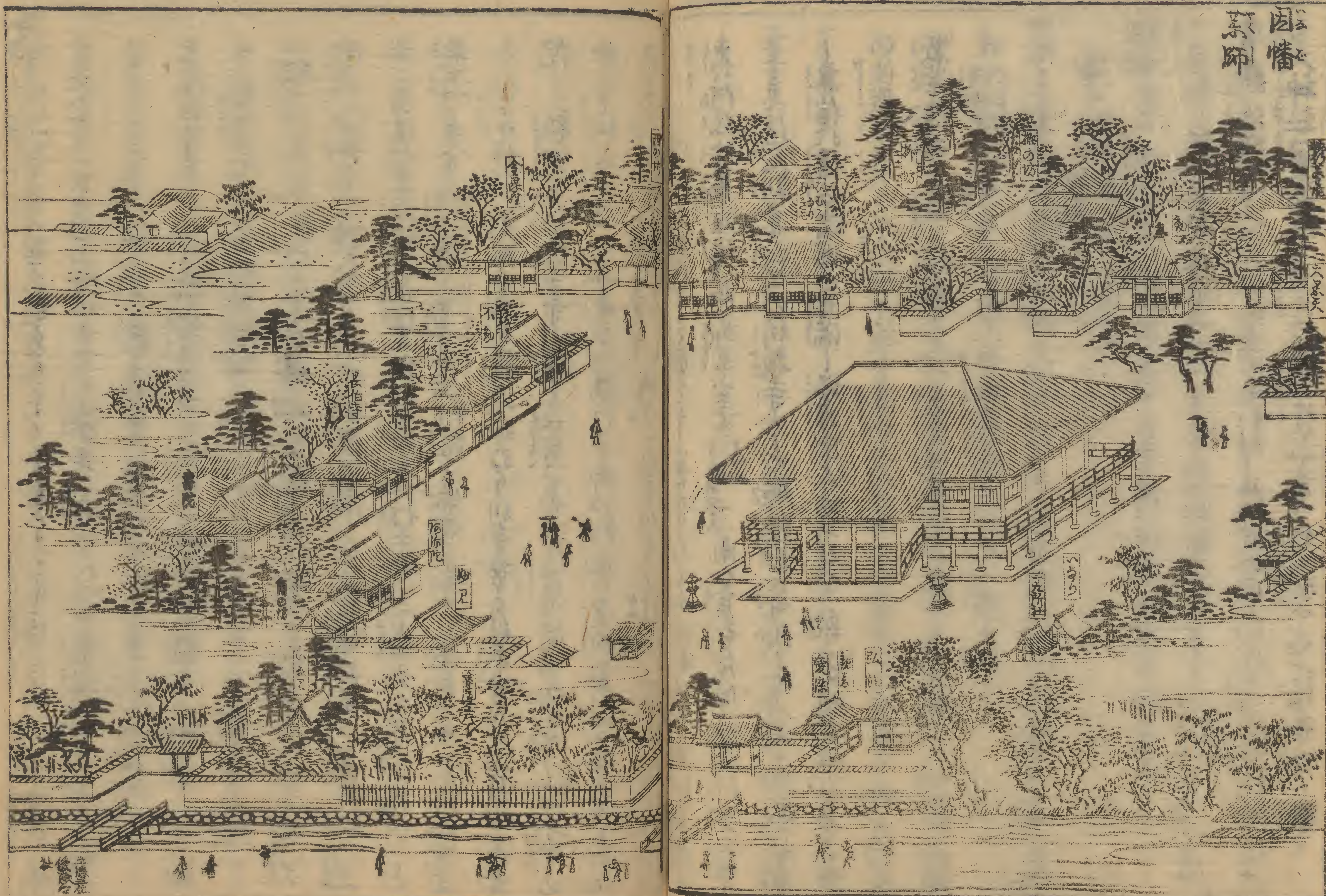
四條立売は四条通東洞院東をいふむかし大内裏の時此所諸品を商ふ市場也（今毎朝高倉四条の北に野草の市立は古の餘風也）

神明宮は綾小路高倉の西にあり又所伊勢内外の神宮なり

大原社は綾小路新町の東にありまた所伊弉冊尊なり（丹州桑田郡大原社とは神之）

薬師道場といふは四条の西新町と西洞院の間にあり今薬師の辻ともいふ

匂天神社は東洞院と烏丸の間なる辻の北にあり竹之辻ともいふ清香庵と號す


因幡薬師
大黒天
不動
書院
阿弥陀
弘法
愛染

因幡堂平等寺は松原通烏丸の東にあり寺務は天台聖護院御門主寺僧は真言宗なり本尊薬師如来は立像にて長五尺二寸碁盤の上に立たまふ脇士は日光月光十二神八王八菩薩を安置す伝記に曰此本尊は天竺祇園精舎四十九院の内東北の角療病院の本尊なる牛頭旃檀木の像にて釈尊みづから刻みたまふ聖容なりしがかの伽藍破壊に及んとするの時東方をさして飛去りたまふと云り

一條院の御宇長徳三年因幡国賀露津の海面に夜々光あり国司橘行平郷漁人に命じて網をおろさしめ海底に沈潜しむるに光明赫奕たる薬師仏を引上奉る其後七年を経て長保五年四月七日に行平郷の居館烏丸高辻に虚空よりして飛来したまへり 後光厳院座は因州より此まて 歴光寺と号して今にあり 則館を仏閣に造りて安置したまふ今の因幡堂なれば本願は行平郷の息光朝禅師なり初寺務とし承安元年四月八日高倉院より勅額をたまひ平等寺と号を永暦二年には後白川院此所に幸したまふ今の堂は足利義教公の再建なり橘行平卿の影像は堂内西の間に安置す東の間には夜叉神を安す 後堂に井戸あり 水鎮の用なりとぞ 鎮守は後白川帝の院宣によって十八所の神を勧請す 後に祇園社記ありて蛭子社に一所をかへ故に十九所なり 観音堂の本尊は慈覚大師の作愛染明王弘法大師の作堂内に安置す護摩堂は本堂の西にありて常に修法を修す 毎年二月十九日は初練供養あり一日より七日に修法を行ひすまし恒例とぞ 執行薬王院には大黒天を安置す 六月七日此所より見物 歓喜天不動明王を安置す梅の坊柳坊には稲荷水室 秋葉社又 当院は祇園御旅所にて少将井社を遷幣に毎年 社を安す又虚空蔵を安置す西之坊には金毘羅を安置す桂芳院には稲荷社あり又不動役行者を安す長伯寺は裸形阿弥陀仏を安置す慈覚大師二條院の后の願により女人成仏の證に作りたまふ金堂の阿弥陀仏は恵日力作なり 京極誓願寺とは旅なり 又粟島明神妙見社を安す角の坊には稲荷大明神鎮座す

又当寺の本尊は日本三如来の 信濃善光寺 嵯峨釈迦仏 其一にして釈尊在世の尊像を御戸開ありし時は勅会の法事音楽等ありて厳重なり代々の天子御厄年に当らせたまふ年は毎月勅使来向ありて御祈祷あり是を薬師詣といふ

繁昌社は高辻新町の東にあり社のある所弁財天女なり 今真言の僧あり 当社門前町の産沙神とす祭は九月廿日なり

朝日宮は白山通〈五条の北 町いふ〉五条の北にあり祭る所天照太神なり清和天皇の御宇貞観年中倭姫

の御告によりて丹波国桑田郡穴生村に造営し給ふ其後正親町院御宇元亀二年に今の地

に遷座し〈祭は九月十六日〉 猿田彦神石〈ひとつのれんせき社内にあり霊験あるし〉 飛梅天満宮〈末社六ヶ所の内にあり太宰府飛梅の古木を蔵む則菅家の額あり〉

神明宮は富小路五条の北にあり古此ところは融大臣の殿舎にて封境にて此地伊勢太神宮遥

拝所として後世ここに社を建る〈祭は右同日なり 今も言伝ふる〉

諏訪社は五条の南二町諏訪町にあり祭る所信濃国諏訪社と同神なり〈獣肉を食ふ者も此社の神箸をうけて食すを許すとぞ〉

新玉津嶋社は松原通玉津嶋町にあり祭る所衣通姫にして紀州玉津嶋と同神也〈俊成卿

の勧請なり 祭は十一月十二日也〉 〈為家卿若年の時此社に毎月六度づゝ百首の歌をよみ奉りしとなり〉

新後拾遺

たのむかな我ふらつれ都ならひされ初し玉津嶋姫　前太政大臣

菅大臣社は五条坊門西洞院にあり祭る所天満天神にして則菅原是善卿の館なり祭は八月

十六日 拝殿の額は天満宮と書し〈竹内御門跡良尚法親王の筆なり〉 天満宮降誕の地〈八分字の石表あり書は烏石の筆なり〉

誕生水〈本社南の垣の内にあり 烏石碑の銘を書れし〉 太師堂〈弘法大師自作の像を安置す〉 榎本社〈近年上冷泉家よりここに勧請しけり〉

北菅大臣〈菅大臣の北門前にあり祭所菅神の作なり〉 常喜院〈北菅大臣の西に隣る 荒木天満天神堂内に安置 金剛力士堂の前にあり〉

新玉津嶋社

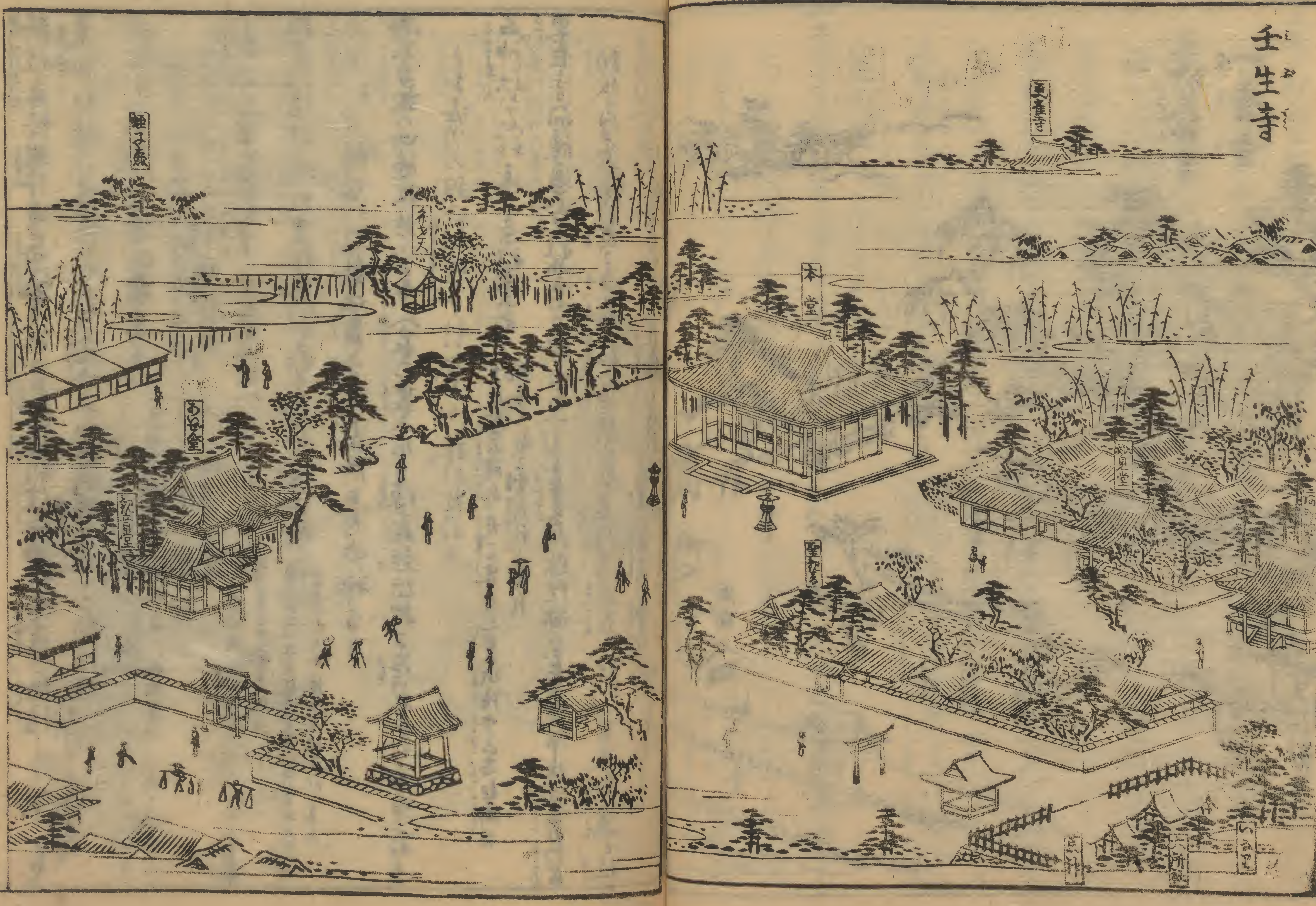



菅大臣社
本社
内外宮
稲荷社
飛梅
小菅大臣社
西洞院
染物屋のてい

五條天神宮ハ松原通西洞院にあり 天使社と称す所祭ハ少彦名命 相殿ハ大己貴命なり
桓武帝遷都の初平安城鎮衛の為造営しあり 醫道の祖神にして古ハ宮殿巍々として
東西四町南北五町の神領に巡らハ樹林森々たり 傳教弘法の両大師も入唐の時帰
朝安全の祈誓を為す 当社記にあり 承安三年文覚上人配流の時当社の鳥居の下に
黄金を埋ける計略にて難風の危を免れしよし 源平盛衰記にみえたり 安元三年六條
牛若丸鬼一法眼に兵書の遺恨ありて戦ひ此感應を得て打勝しも此所にて武蔵坊
弁慶に逢ひしも此森より也 至徳元年には将軍義満公殿舎を再建しあり 今ハ九月十日
又節分にハ白朮小餅を賣 船張 禁裏より
小餅料ハ天文二十年将軍義輝公の母慶寿院より寄進ありて今に至りて此所の例とす
として年々是料を賜ふ 公族諸人群集して
厄難除滅を祈る 三種の神物ありといふ
一音寺ハ天使社の西に隣る 本尊十一面観音の長二尺七寸 弘法大師の作 淳和帝の宸筆
天下大に疫を病み天皇万民の為に伊勢春日両宮へ幣帛使を立られ 神託ありて和州
長谷寺より迎え奉り 弘法大師に勅して造らしめ給ふ 一尊の像なり 洛陽観音巡の 第二十八番 疱瘡神
文徳天皇の御宇天安二年 星霜 正利といふ 新羅国へ渡海の時 正利 當寺の本尊



壬生寺



新住吉社ハ醍井通高辻角にあり當所ハ摂州住吉明神の傳を成かり勧請し奉る一とかくを
荒神社ハ醍井高辻の北にあり文永年中摂州勝尾寺より勧請され 近邊川ハ赤清荒神寂照のことなり
化粧水ハ西洞院四條の南にあり いふしハ此所に小野小町の別荘ありしくみれより三間斗
藍染川ハ小野小町に通じて此のけし水ハ四條通人家の下ニ西へ流れ西洞院川へ落る清川あり
ある入て死せし故に増れの裏入此橋を通りし
小松内府重盛別業ハ室町四条の南西側にあり 一説にハ大仏を宗任の旧地といへり高藪
えびす神ハ本殿を清水今にあり
夷毘沙社ハ猪熊通松原北にあり當所蛭子神之 當社の付ける祀る所人自筆の九字の名号あり十月廿日にうれしと云ん
天道社ハ五條坊門猪熊の角にあり當所日月の神なり
御太刀松ハ四條猪熊の角人家の裏にあり源義経此松に太刀をかけし事ある
ところ堀川の館の封境なりしハ實ハ御館の松なり
石神社ハ石井通二条の南にあり 當所豊石櫛命奇石窟命之古ハ此地中山忠親卿の亭なり故に中山社と称ス
東雀寺ハ四條通大宮の西にあり浄土宗にして本尊阿弥陀佛ハ春日作く中将實方朝臣
勅拾らけてお位ある時ハ吾妻に赴き陸奥に於て卒されて其霊雀となりて此寺に来り棲と住
古紀智はすむ故にこの寺を雀寺といへり 此地舊ハ大内裏の勧学院 實ハ方塔 寺内

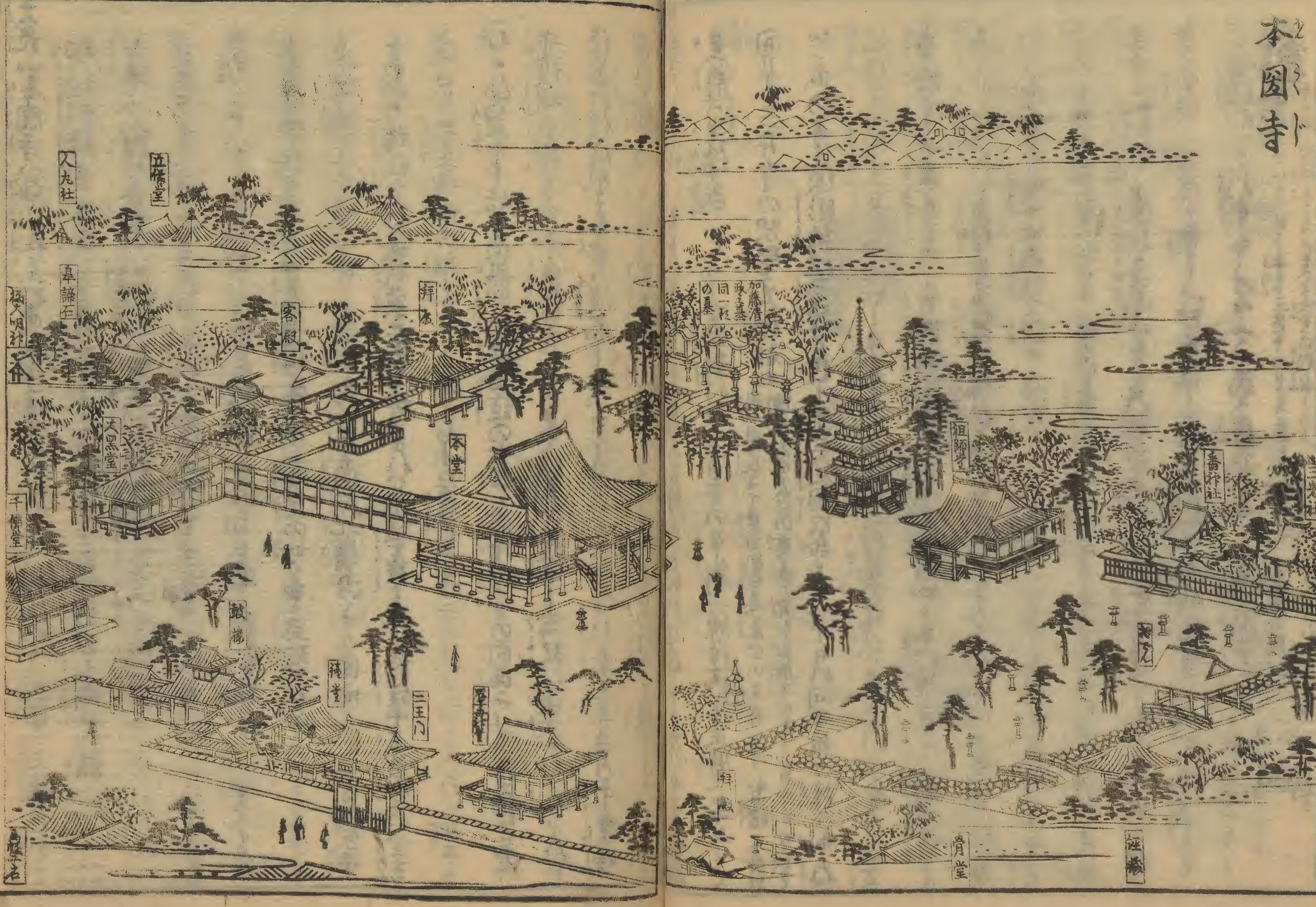


あたごまゐりの
こぶねあそ
むかひくらり定まる
ねまれ数廿六番あり
桶より　花盗人
紅粉猪　猿
愛宕の参り狐仕て
ゆうらくあり　鶏
老ろう六人盲人川渡
節分　花ゝ
猿引　蛸と角力
餓鬼責　蚤払
熊坂　羅生門　湯立
さいのかう棒ちぎり　性名坊主
あつひのう人　男伊達
棒ふり

壬生寺ハ五条坊門朱雀の東にあり宗旨ハ古三論律にして和州招提寺に属す本尊地蔵
菩薩ハ坐像長三尺にして定朝の作也当寺の草創ハ一條院御宇正暦二年にして
開基ハ三井寺の快賢大僧都也（姓ハ藤氏にて粟田関白道兼公の支族なり智證大師に随身して天台の奥義を究む永承十六年十二月十六日寂を）
地蔵の尊像を彫刻せんと願を発し佛工定朝に命して一千日の間に彫り終り相好
圓備して恰生身に向ふが如し四季毎の守なるとて持物の錫杖ハ慶の日本尊の四方
遥なくして異香薫じ音楽虚空に聞えて聖衆来迎の如し午の時斗に及んで漸く雲晴ぬ
本尊を拝すれハ忽然として六輪の錫杖を持給ふ又本尊ある夜夢に告て此錫杖ハ釈尊
伽羅陀山にて延命地蔵経を説給ふ時手に持給ふと告給ふ当寺の最初ハ草堂にて
此本尊を安置し給ふ弘二年に堂供養ありて小三井寺と号く其後律院となり建保
年中に和州前史平朝臣宗平本尊の利益を蒙りて堂舎僧坊悉く造営せられ此時ハ
寺を宝幢三昧院と號し又地蔵院とも称す白河院鳥羽院後白河院順徳院当寺
に信敬ありて御帰依ありける由縁起に委し中興ハ圓覚上人
大念仏 圓覚上人より始る毎年三月十四日より九日まで壬生の狂言とて
壇供 毎年正月…より…人…を…て…



本圀寺



大光山本圀寺ハ堀川松原の南にあり法華宗にして一致派なり開基ハ日蓮上人なり
初ハ相州鎌倉松葉谷に建立ありて法華堂とおほせけ一宗最初の精舎なり
日蓮上人姓ハ三国氏（聖武帝の苗裔なり）父ハ遠州の刺史貫名重実か次男なり母ハ清原氏なり
貞応元年二月十六日午の刻に房州小湊浦に誕れて十二歳にして同国清澄寺に登り道善に
学ひ十八歳にて落髪し名を蓮長と号し後に自日蓮と改む初稚なりし時常
に虚空蔵を祈るある夜の夢に老僧来りて手に明星の如くなる宝珠を与へて授けたまふより
して一を聞て十を悟れりかくて諸宗にいたり南都北嶺にいたり園城に入ては学び宗意を究
ることあれとも倩諸宗の議判紛々として決しかたしされは蔵経を披きあらゆる諸経中に最第一の金言
なりとし衆生成佛の根元なるを知て建長五年三月廿八日二十二歳にして朝日に
むかひ合掌し始て南無妙法蓮華経の七字を唱へ清澄寺の南面にして一山の僧並外
守護職東條左金吾景信等をあつめて法花を演説し論釈の義を引て念仏が
諸宗の僧徒風の木葉の随が如し是一宗流布の濫觴なり弘長元年五月平重時
かれを妬で伊豆国伊東満に左遷せりまたある時相州竜口の刑にて誅せらるべしとて

敷革に座しのそみ天俄にかきくもりて震動して太刀取眼くらみ劔段々に折れけれは相模守
大に驚き死をゆるしたまへり又文永八年には佐渡国に流されしかとほとなく赦免ありて
かれ赦免状をとりの後に帰りしより宗派海内に瀰く流布し遂に相模守も貴
敬し上人に文永十一年五月に鎌倉を出て甲州身延山に入て草菴を結ひ其れ朝に究
城折て佛に供し秋の夕べに月を待て経書を照し又ある時夜の雨の窓にむかひてよみたまひし

和歌　ふる雨はおとし風のそよくれ窓をうつらし　日蓮上人

後宇多帝の御宇弘安五年十月十三日武蔵国池上の右馬允宗仲か家にて遷化なり　行年六十一歳
鎌倉松葉谷の法華堂を日朗に附属して日印これに住し日静の時勅願所となり
光明帝の勅によりて相州鎌倉より京都に移し六條堀川に移し（此地古へ未だ判官為義の館の跡義家もここに居せられ其後物語にあり）

本堂ハ法華経を本尊とし　これの外日助僧都一字

立像堂には釈迦仏を安置す（豆州伊東の海中の網にかかる）

祖師堂（日蓮上人の影其外日朗日印日静日像の影を安んじ此寺の開基）

方丈（妙法花院と称し此寺初ハ江州安土にありて）

人麿社（方丈の庭にあり）

皐諦石（方丈の東にあり）

鵜鷺曼陀羅（日蓮上人のまする）

佐女牛の井ハ
醒井五条の南にあり井筒に
銘あり

佐女牛井
元和二年
有楽再建す

足利将軍義政公
茶道に寵せられて
とくにこの水を愛し
給ひしとぞ今ハ
用ゆる人もなく
草茂り苔深く井筒
も埋もれたれども
むかしをおもふよすがなれ
順徳院の李白が詩に
石甃冷蒼苔
寒泉湛月明
といへるの情景ならん
かしといふべし



本願寺ハ西六条にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法なり（聖人の影像ハ植髪の影堂の所にあり）当寺の草創ハ
亀山院の御宇文永九年聖人の息女覚信尼公（日野左衛門佐広綱卿の室なり）勅を蒙て洛東大谷に
始て廟堂を建立し（開山滅後十一年なり）亀山院勅願所として龍谷山本願寺の号を賜ふ第二代
如信上人（開山の嫡孫善鸞の息也）其ハ頃奥州大網郷に居住し故に覚恵法師（広綱の子母ハ覚信尼第三代）
覚如上人（覚恵の息にして覚信尼の嫡孫）大谷の留主職となり夫より覚如上人第三世を継で後伏見院正安元年
に勅願寺とせられ綸旨を賜ふ第八代蓮如上人の時宗義大に繁昌し宛周山に仕世に赴
とり山門の衆徒是を妬で寛正六年に当寺を破却し又寺門に井の流溢ハ蓮如上人
小荷擔し近松寺に寄附し聖人の御影をよせられ蓮如上人ハ小国に経
回し越前吉崎に御堂を営北陸七州を化導し其後文明十一年山州山科郷に影堂
を建立し第九代実如上人に紀伊を譲第十代証如上人の時御堂を摂州大坂石山にうつし
十一代顕如上人の時二品親王の勅書を賜り御門跡の号を勅許ありて又御堂を紀州
鷺森にうつし其後天正十九年八月六条堀川に移させ（委ハ信長記拾遺にあり）
本堂ハ開山親鸞聖人自作の親像也安置しぬ（此像ハ開山在世の時彫刻しありし息女覚信尼公へさづけられて聖人の滅後遺骨を細）

抹して漆ふ和し彩色同色せり故ニ骨肉御影と称す坐像ふして長ケ一尺八寸許なり本堂ハ又古ハ須本寺のことく紫宸殿拝領ならり御堂造りハ紫宸殿の模形ニ堂ニ前の高欄ハ内裏ニなし

南ふの脇壇ニハ前住大僧正并ニ外歴代の画像を安ス餘間ふハ九字十字の名号並安ス寂如上人の筆之 毎年報恩講七昼夜の法会ニハ八幅の絵傳壇上ふかくる

阿弥陀堂 本尊阿弥陀仏を立像長三尺餘ふして春日の作なり脇壇ふハ六高祖聖徳太子法然上人の画彩色安ス 當御門主法如上人の御讃之

集会所 法会執行の時僧侶ここに会ス

轉輪蔵 一切経を蔵む額ハ寂如上人の筆なり

撞鐘堂 舊ハふ泰広隆寺にありて少納言信西入道の銘あり由縁鐘銘ハ信長記拾遺ニ委し

鼓楼 此太鼓ハ大和国西大寺ふありしなり胴内ふ其由縁を書む豊心丹の主方ハ坊官下間氏ニありしなり

唐門 南の築地長辻ニあり此門ハいにしへ豊国社ふありしなり走獣等の彫物荘厳花美ふして希代の奇物なり

虎間 ならり茶絵出ん四方ふ虎を画

浪間 天井ニ波を画南の方ニ車よせあり聚楽亭ならうつされしを

對面所 大広間といふ絵ハ長谷川等漢の筆なり前ニ能舞臺あり

白書院 小広間といふ画ハ右ふ同じ筆なり前ニ能舞臺あり

黒書院 西ハ狩野探幽の筆なり

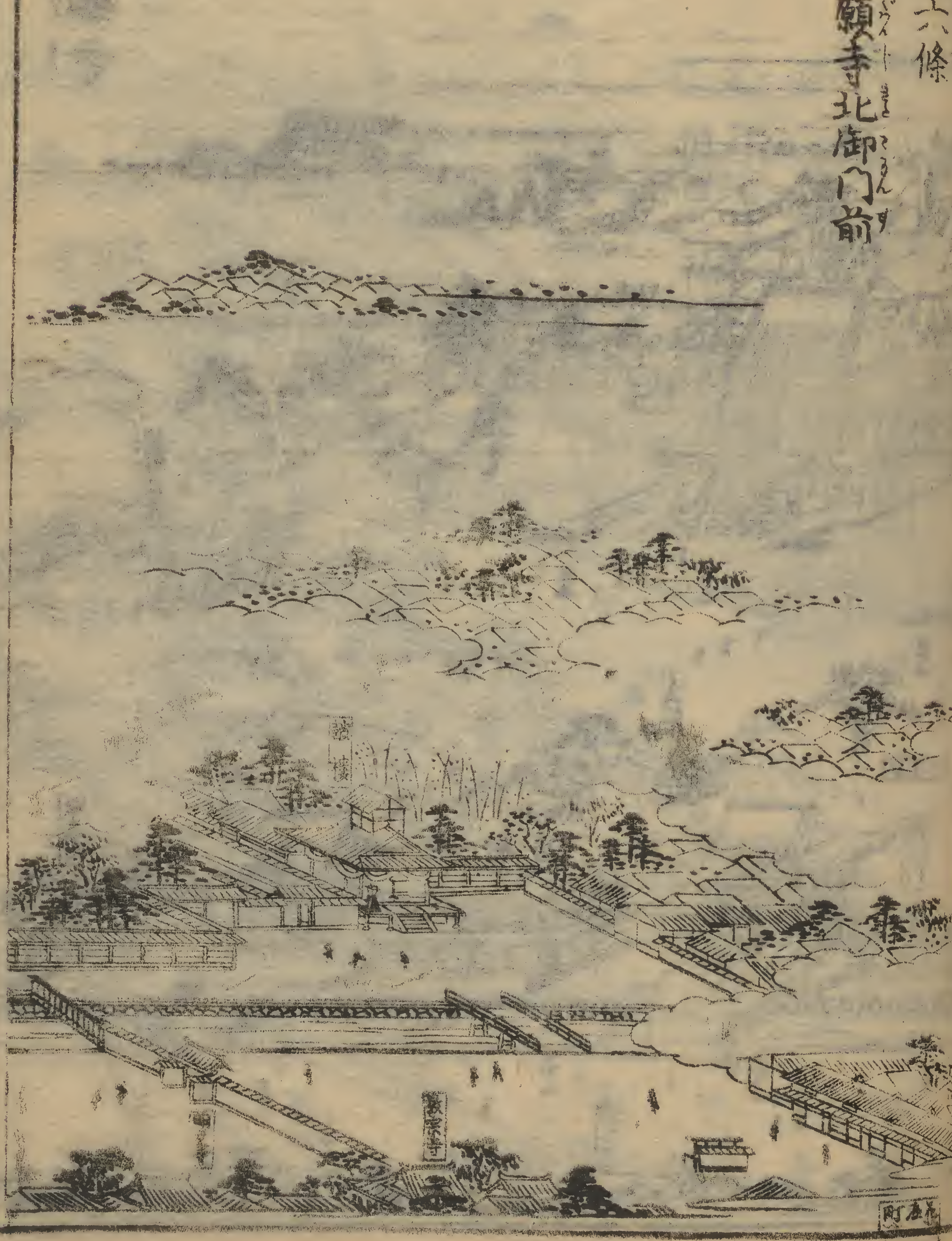
其外閑雎殿 滴春館 永安館 挑仙館等の殿舎高閣多しといへども繁なれバ略す

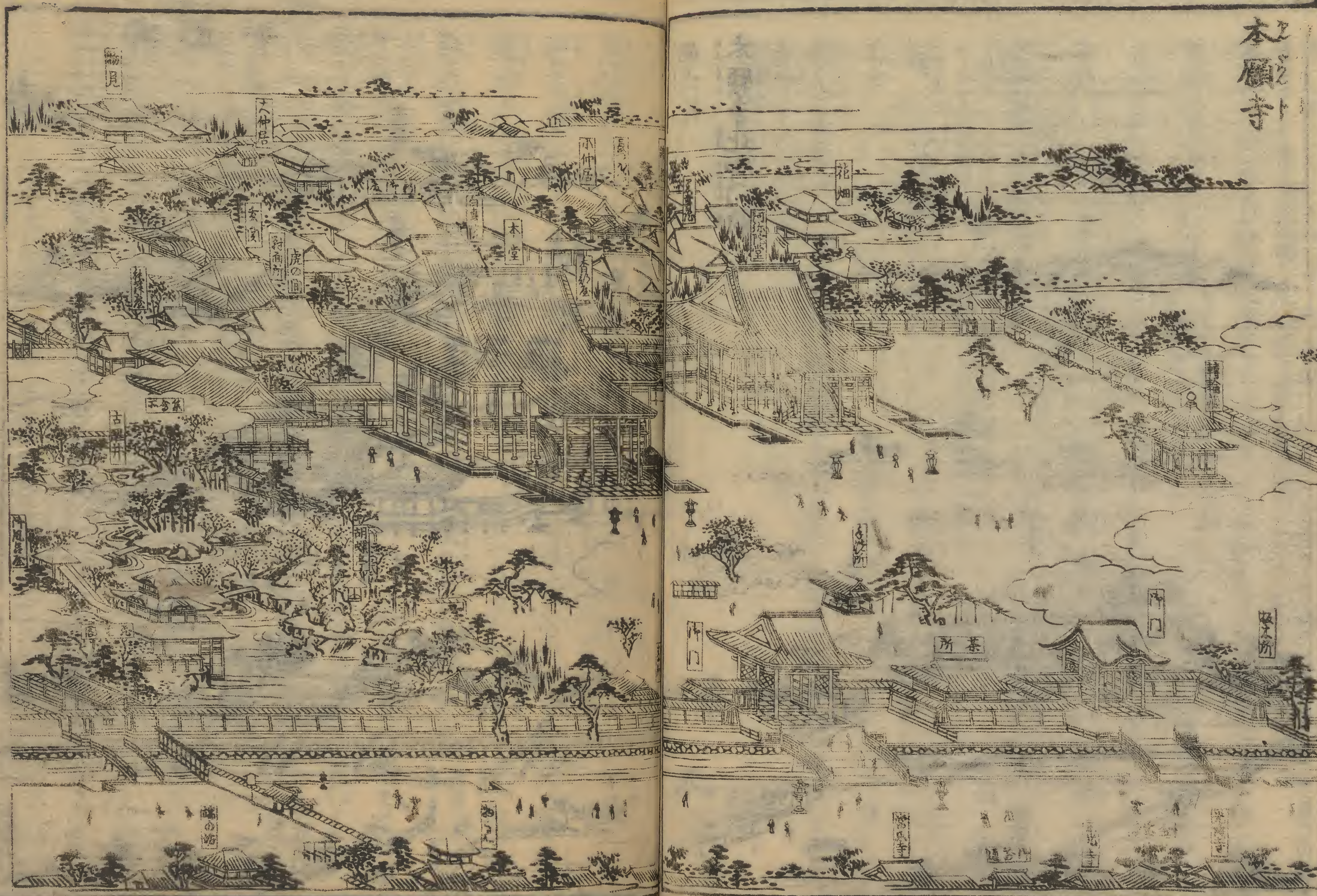
大仲居 臺所をいふ元伏見城ふありしをうつされしなり入口の唐破風ニ大黒天の像あり三ツの俵を踏む

滴翠園 集会所の東ニありて名區の十勝あり

高楼を飛雲閣と號す是ハ太閤秀吉公の時聚楽亭ニありしを此ニうつされしと云へ

西六條
本願寺北御門前




本願寺
本堂
花畑
茶所
御門

九條関白尚實公の御筆之閣上の画ハ霞れ富士中閣の画ハ三十六歌仙としかり
古法眼元信れ筆之下を詔賢殿といふ 飛雲閣の記ハ殿中の東にかかる十六世准如上人の御筆 終ふして當御門主法如上人筆跡添ゐまふ
池ハ高樓を巡りて常に船を浮むまた名を滄浪池といふ龍背橋を渡るて踏花
塲あり此邊櫻樹数品あり胡蝶亭の傍にハ夜光石あり嘯月坂ハ池の巡りの
坡をいふ黄鶴臺ハ高閣の西にあり御湯殿あり醒眠泉ハ一名古醒井といふ 洛陽七井の其一なり 今ハ當御門主新に
文如上人の艶雪林にハ梅花多し青蓮榭ハ茶亭にして又澆花亭ともいふ
碑の銘あり
遊し華林園に同うして鳥獣禽魚此の門かう来つて人に親の芳園なり

常樂寺

西本願寺のまへにあり 本尊阿弥陀佛ハ春日作 立像長 開基ハ覚如上人

此人ハ明教智而して顕教を玄智僧正に学び密教を經恵僧正に学び其の奥旨を語

能善して名を著せり當寺初ハ大谷通に営其後洛東今小路に遷て常楽臺と称す

興正寺

西本願寺の南に隣る 本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作 當寺の初ハ宗祖親鸞聖人四十歳の時

山科れ郷中に造營し興正寺と名付け高弟真佛上人に附屬しぬ其後今此敷所中

庄汁谷より後醍醐帝の御時佛光寺と改む 十四世経豪上人本願寺蓮如

上人を帰依し佛光寺を出て新に堂を建て旧号を用て興正寺と称し

興正寺





東本願寺ハ烏丸六条の南にあり宗旨ハ親鸞聖人の弘法にして開山より第十
一世顕如上人の嫡子教如上人慶長七年関東の　台命を蒙りて六町四方の寺
地を給り新に御堂を造りて東本願寺御門跡と称し宗祖より十二世の血脈
を相續す本堂ハ親鸞聖人自作の像を安置す　坐像にして長二尺八寸余　上野厩橋妙安寺にあり
にして　脇壇にハ前住大僧正其外歴代の畫像を安す餘間にハ九字十字の名號を
かゝる開山聖人の筆なり阿弥陀堂の本尊阿弥陀佛ハ安阿弥の作　立像にして
脇壇にハ聖徳太子法然上人其外三朝六高僧の畫像を安す大門　本堂の前にあり　阿弥陀佛の大門と云
の坐像を　菊門　大門の北にあり初ハ秀吉公の壮観にして伏見城にありしを此の扉に菊花の紋あり
安置す　金紋彫花飾を施して洛中の壮観なり
阿弥陀堂の門　これも伏見城よりうつされ　撞鐘堂　伏見城中の井戸　屋形あり　玄関ハ式台
橋ありて長七間　世の人日暮の門と云　大廣間と号す　小寝殿　小廣間といふ画ハ　白書院　黒書院の間
幅三間の一枚板也　寝殿　西ハ御楽の間　松の間　雪の間
小路鷺の間あり続て舞臺ハ集會堂の西にあり其外殿閣堂舎等花飾を尽く
して他境に勝まされ繁昌なれバ略す
東殿　今ハ百間　屋浦あり　台命によりて境地を給り東本願寺の別館として舊地所とす


臺所
寝殿
大門
本堂
阿弥陀堂

河原院の旧跡にして此邊の出島に九重塔あり是則融大臣の古墳なりといふ 此所ニ融公の社あり
境内の降誕下寺町万年寺
にうけをうけりといふ
池水ハ東の高瀬川より流れて常に溶々たる水あると獅子口よりいふ
臨池殿の庭ハ小堀遠州れぬなり風光奇にして真妙なり

炬火殿ハ七條鴨川の西にありの御旅所 倉稲魂命と同社に併せて天智帝の勅請之稲荷の末社の日神輿臨幸の時七條河原に出むかへ松明を照し神輿を迎ふるなり此社の舊例にて故に名とん

當社ハ舊弘長三年二月神託によりて七條の西東洞院の東に建立し 且後應仁の乱後鴨川の西七条の北に遷し寛永八年今の地にうつせ

発句 いなりの祭日
稲荷山こえ六條しれ家々を都のうちにゆるかんかなり 貞徳

金光寺ハ七条間の町にあり當にあり七條道場と称し時宗にして本尊ハ阿弥陀仏立像なり脇壇に一遍上人の像あり 此上人の俗姓ハ伊豫國河野七郎通広が息にて二人の妻を如何の所に嫉妬して頭をよく化しけるを見て通久なられ給ふて大に發心し刀剣をぬいて頂に斬なれて妄執輪廻を観念して不動乃修しける時に建長年中と始ハ台教を学び又禅門に治て権現の示現を蒙り四十八文をこころうたる時宗の派を開き其後一遍上人ハ佛法の宗師と遊行十万人念仏往生のれを弘む

歓喜寺ハ九條烏丸にあり本尊銅像音ハ恵心大師の作なり
洛陽彼岸迎への 貞一

宇賀ノ社ハ九條の東にあり此所宇賀大神此所の東西の徑を宇賀辻子といふ

東殿

東本願寺別荘 ふうりゆうにハ百る 座敷とりへ



藪内紹智の家ハ西洞院小路の北にあり鼻祖剣仲紹智ハ千利休の高弟にして
師に向つて曰秀吉公の寵余に超られ遠き慮あれバ近き害あらんと諫しかど
利休悉不與ずして紹智を退けれバ大徳寺の三玄院に寓居し利休の滅後洛に帰り茶
竹に住し専ら茶道を行ふ其後鷹司通 今の下長者町なり 新町の西にうつされしより本
願寺御門主良如上人の招に応じて今の地に止住し故に茶道の下流と称し利休
嫡傳の正流なり古田織部の数寄屋あり 大坂動乱の時此家に譲り出陣しければ織部の数寄屋と號く

芹根水ハ堀川通生酢屋橋の南にあり 近年書家烏石葛辰清水を井筒に入て傳ふ 芹根水の碑を建八分字に書して石面に
影刻とて又公卿の詩哥を集む其序文に曰

源融公むかし此邊青白たりし院に泉を愛し院に今もの竹林に
ある所において奥別に賀茂の塩竈の泉をうつし汐汲のありさまを
弄ばれしよしぞ其居宅の用にそなへしおやかくの如く清水湧出て
絶せぬハ知られぬ霊水なりと石擁石鉢をうがちて名蹟乃
所以を公にせんとての今此その資へを喜捨して烏石先生流に其葛
ア其経営れしより諸君子其事叙善くして文藻に属きとて
寛雅公ハ轉法輪殿の御子にぞて随自意院叙王御猶子にて上の醍醐報
恩院に住持し給ひ大僧都法印なり先生の御効よりれしかバ作儀なき
まうしあけり公卿の和歌製ありけれてられ御吟有ん

稲荷社 油小路生酢屋橋通の南にあり東寺稲荷社の御旅所の社人田中氏此所に住居す
道祖神 不動堂の南にあり猿田彦命を祭る 古ハ五条新町の西にあり首途神と称す 書聖天満宮 道祖神の社内にあり烏石葛辰碑の銘を建る篆字ハ図八駿の筆なり
稲荷御旅所 道祖神の南二町にあり稲荷の神輿五座を安置す祭ハ三月中の午の日に神幸ハ四月初の卯日還幸に五座の神輿此所に別て御旅所なり
春日森 蔵王森 あり由来不詳
具霊神ハ此地に鎮座して穏る 蔵王森の南にあり此所寛算供奉の処乃 遺跡あり寛算といふ人此所にて伏臥しけるとなり
寛算の石 昔平家物語に曰三條院の御時に寛算を御修法に召されしかバ
吉御旅所 八條坊門金替町の南にありむかし此所ハ二階堂観世音ありしとぞ
稲富といふ今此紀者ハ泉涌寺の内善能寺にあり此社の古居通り紙屋福子
ひよし此寺も今ハ泉涌寺の内にあり 柴守長者 弘法大師縁起に曰空海紫宸殿に召されて
大六の釈迦佛を安置せん 二條殿と称する名主によりて紫守長者とぞいふ空海ハ其家に寓す
さて此君ハいかなる人ぞとありけれバ都八條に住める柴守長者となりて
も都にありて佛法を弘めんと思ひ給ひ且後弘仁十四年に東寺を給りて
ましましける二階堂ハ柴守長者の家をつくりしと申されしかバ空海のもとに
にもたれさんとありけれバ此寺を建て佛法の守護とし給ひて社をいつきて自額を書て給ふ也
のひとつの今の稲荷山あれば二階堂ハ
則御旅所としてあり

粟嶋社 堀川の西生酢屋橋通の南宗徳寺の内にあり 紀州粟島の勧請なり祭ハ三月三日
古井土 大宮八條にあり 傳曰源融羅生門に金札を建て附せし所に馬を繋ぎ井を掘て此名あり又此所を故にと云の記は不詳
清盛の館 西八條殿と号し平家物語に曰平相国禅門を八條殿と云 西の方一町の内ありしかバ人ゑとかの入道に焼亡す八条の館の一跡
住吉社 大宮中通寺にあり此所播州住吉の勧請なり又西京塩小路町の寺の社内にあり
寛永六月廿八日なり


七条河原
松明殿
四月上卯日
稲荷御祭禮
稲荷社



月見橋

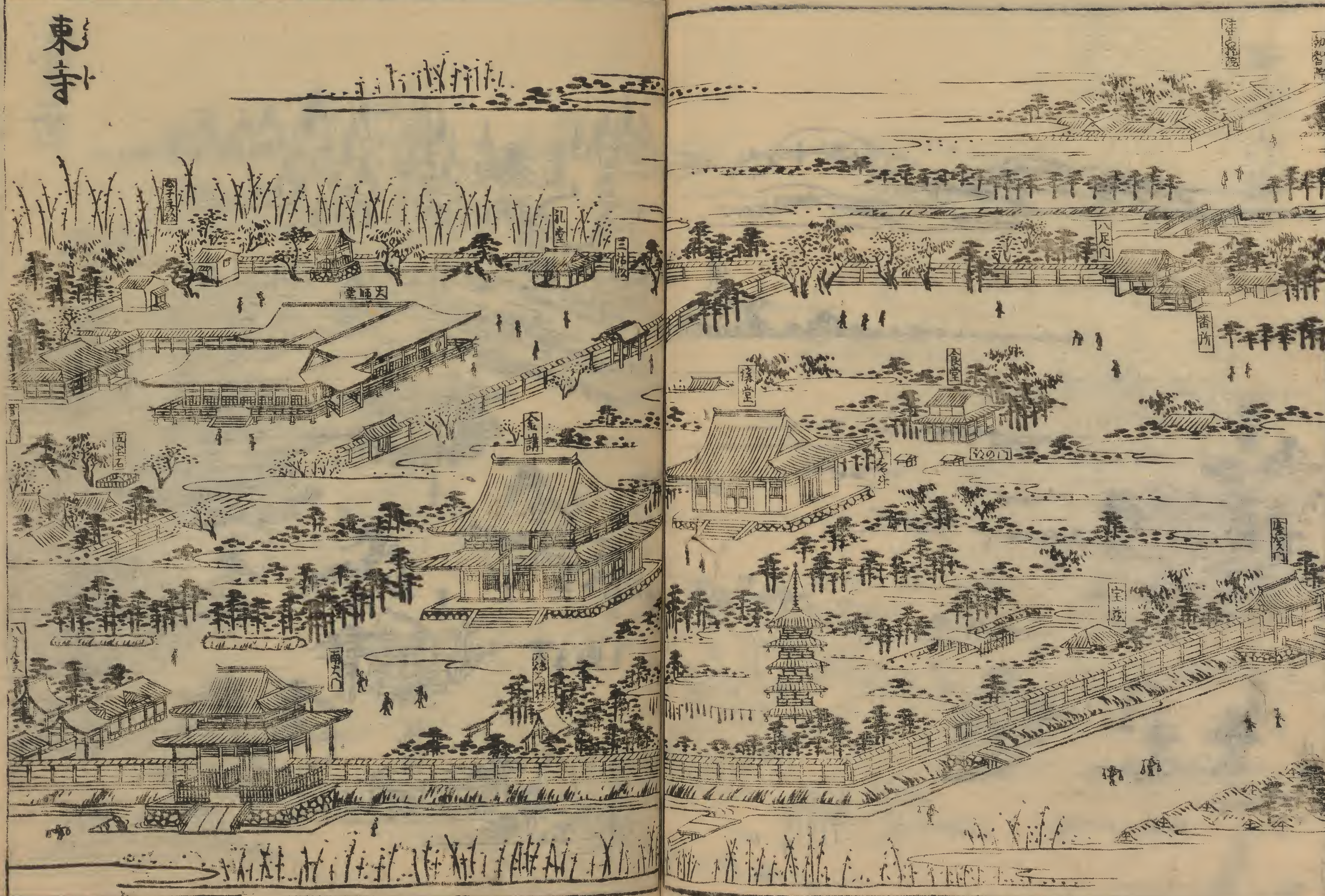
堀川の東木津屋橋より
むかしのことつたへれば信濃
國更科郡姨捨山より
移しとて世の
人月見橋と
いひならはし
侍る

芹根水は堀川
木津屋橋の南にあり

融公千載宅
今見石泉清
若使陸生品
南零應讓名

寛雅公


稲荷沛旋
古井社
古沛旋
不動堂


東寺
とうじ
大師堂
五宝石
食堂
八足門
番所
宝蔵



遍照心院
神廟
六孫王社
五所社
本地堂
佛殿

八幡山教王護國寺秘密傳法院 東寺又左寺とも號す 大宮通西八條の南にあり眞言宗の源にして開祖は弘法大師舊は此地は大内裏の鴻臚館にして来朝の賓客を饗す漢朝の鴻臚館を不空三藏に給て精舍と営し其例に准じて弘仁四年これを空海に給ひ右寺を守敏に賜ふ抑弘法大師は讃州多度郡屏風浦の産にして光仁帝寶亀五年に誕じ給ふ十八歳にして大學に入至りて志佛經にありて遂に出家して延暦十四年東大寺の檀にのぼり具足戒をうけ名を空海と改む靈夢ありてよりて和州高市郡久米道場の東塔の下にて大毘盧遮那神變加持經を得られ文義曉しかたかりければ延暦廿三年五月に入唐して唐の貞元廿一年十二月十一日青龍寺の慧果阿闍梨に謁しかの經の奥儀眞言秘密を傳ふ大同元年十月に歸朝し傳来の密法を弘むるに嵯峨帝勅ありて内裏において諸宗の名僧をあつめ空海にあひてその所の宗義を論せさせ給ふに空海の曰我宗は大日神變は眞言一の阿字を説くされば即身成佛をしめす諸宗一同に是をとやかく議論さかんなりければ帝空海に即身成佛の本を示さるべしと勅ありければ則五藏三摩地観に入忽首より五佛の寶冠を出し身より五色の光明を放ち面貌金色なりて毘盧遮那佛となる帝は御座をおりてうやまひ諸宗の僧は合掌して地にくだりしたがひ議論あるからしば宗風日本に弘まる弘仁七年に紀州高野山を開き金剛峯寺を建立し仁明帝御宇承和二年三月廿一日六十二歳にして高野山に入定なす其後延喜廿一年に弘法大師と諡を宣下しありけり 日本に生死不思議の人三人あり生ありて死なきは空海 死ありて生のなきは天満神生も死もなきは人丸なり

金堂 本尊は藥師佛脇士は日光月光なり焼失の後豊臣秀頼公の再建之洛東大佛殿の模形なり 講堂 本尊は大日如来 金剛菩薩五大尊四天王梵天等なり 食堂 本尊は千手千眼観世音聖寶僧正の作なり脇士は地藏毘沙門なり 先年佛儀落るはむかし西寺にあり 毘沙門天は羅城門の楼上にありし 夜叉神 いにしへは食堂の門に安置す今礎石あり左右の小堂に雄雌の夜叉神を安す大師の作なり 五重塔 四仏を安す 焼失を後 御當家の再建なり此塔少し西南の方へ傾くあれは よりくりの方に池を掘て其傾を直さる 灌頂院 秘密灌頂の所なり 八幡宮 大師の作 弘法大師神像を拜して彫刻したまふ 八幡宮 當寺建立以前の鎮守なり故に地主の神とす 寶藏 巡りに池あり 大師の法器を藏む 宝藏の南の池のほとりにあり [illegible] の形なり 南大門 二階の楼門之 金剛力士を安す 東は慶賀門 東の門を 蓮華門 西の門をいふ大師入定のとき此門より出給ふるとぞ 西は濃慶の形なり 猫瓦 巽の方の築地の上にあり此築地造営の附は揚系京時奉行をなしける人なり

西院 開祖弘法大師の影を安置す 法眼康勝の作なり後堂にある大日不動尊
大黒天 西の院の傍に安す 愛染明王 四天王 般若菩薩を安す大師の作也
大師の作なり 安置す 持仏堂に 五宝石 後堂の白砂にあり 一名不動石ともいふ
三鈷松 西の院のまへにあり大師唐土より帰朝のとき秘密教相應の地あらば
此三鈷止るべしとて空中に投給ふ上洛の後此所の松枝に止りたり故に名
づく又三葉の松ともいふ 松子房松 西の院の乾にあり

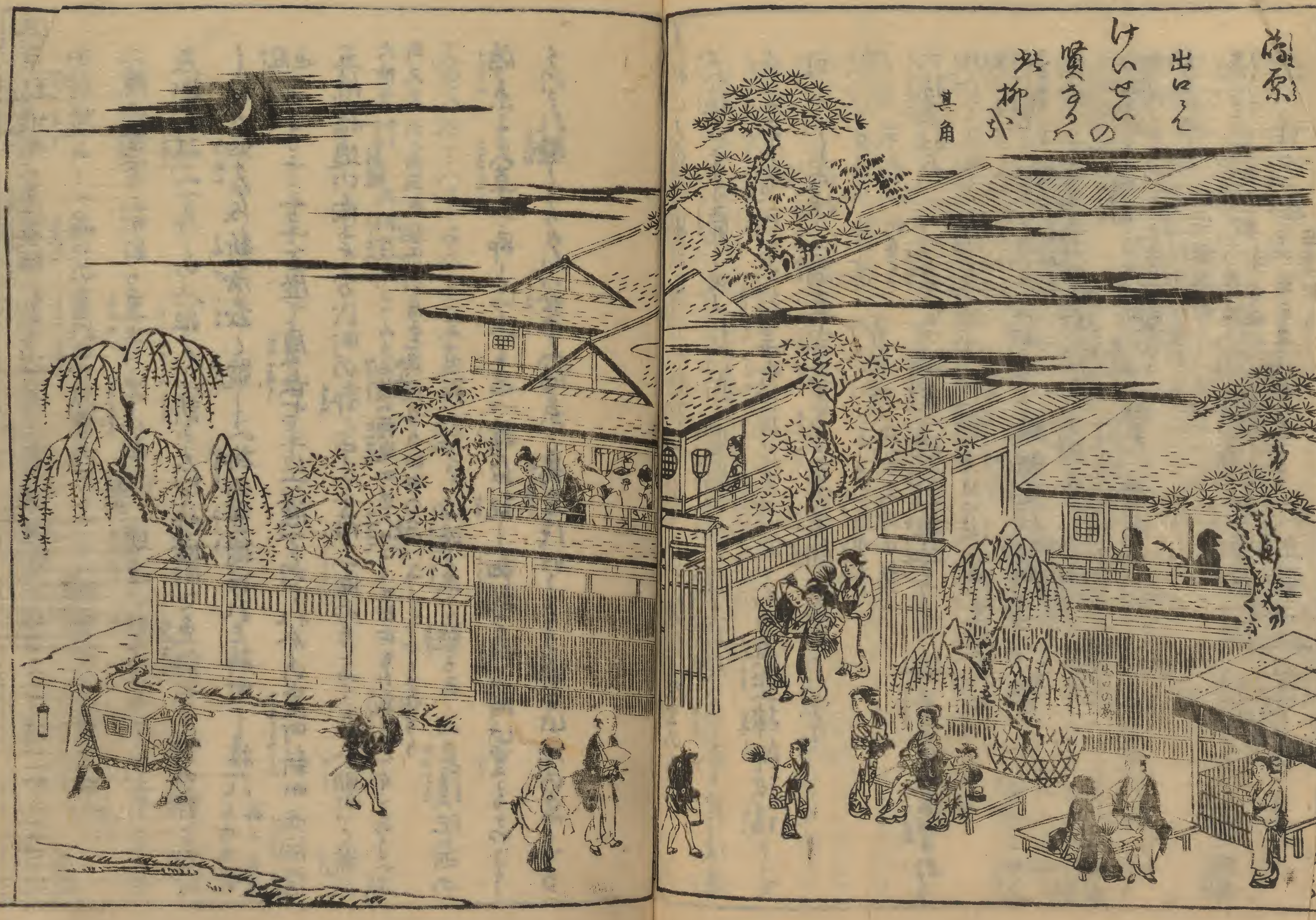
楼雲記に曰 元弘三年五月十六日波羅攻落て越後守殿上ならぬ進む
後醍醐天皇則入洛あり播州書写山より新田義貞
より小条高時滅亡のよしを注進す 楠正成兵庫にて
迎奉る時に勅領によりて東寺へ行幸松子房
にて此松の名を御問ありてよのもしく叡覧しく
前大僧正頼意ちなみに詠む

植置しむかしやたれそ契りけん今日の御幸を松風の声

羅城門の舊跡ハ朱雀通 今の千本通なり 四塚にあり此門ハ植武天皇平安城造営の時
初て建たまひし大内裏の南面にして外郭の惣門なり 楼上に毘沙門天を安置す 弘法大師の作なり
今東寺の[illegible]堂にあり

梅城録に曰 都良香羅城門を過る時に 気霽風梳新柳髪と詠じ
けれバ楼上に声ありて 氷消浪洗旧苔鬚と付ける
あれば鬼神の作なりとそ録しけるこれハ自歎しあるとそ
下の句ハ鬼の詠ありしとなん

萬祥山大通寺遍照心院ハ八條櫛笥にあり此地ハ源経基公の殿舎にて
天徳五年に薨じ給ふ後此所に霊廟を建六孫王権現と崇奉る其後鎌
倉右大臣実朝公の後室二位禅尼大檀越となり真空律師を請して
開山とし戒律二論真言等を兼学の梵刹となりける
仏殿 本尊阿弥陀仏ハ運慶の作なり 本地堂 本尊不動明王ハ興教大師の作
六孫王社 此所ハ経基公の神霊を源氏の祖神として 御当家より造営なり
神前にハ諸侯より奉納の石燈籠数々あり 祭ハ九月十一日 神廟 本社の後にあり 貞純親王社 本社の巽にあり
神龍池 神前の池なり例祭にハ放生会あり 辨財天社 長老一尺五寸余 弘法の作なり 誕生水 源満仲公誕生の
産湯とし洛陽の名水七井の其一つなり 阿弥陀仏 立像長二尺五寸安阿弥の作にて 親鸞聖人
の附当寺に持来るし今門内の宝蔵にあり二月十五日開帳なり 宝冠釈迦仏 方丈に安す 定朝の作 実朝公影 方丈にあり
方丈の庭 廬山の景を模して庭中絶妙なり
満仲公誕生地 八條通大宮の西にあり今六孫王の御旅所となる 歓喜寿院の旧跡なり 七條朱雀の東にあり此所ハ歓喜
首大明神森 壬生通の東櫛笥の西にあり 由来詳ならず 人丸塚 坊城通る辻の南にあり 由緒詳ならず



嶋原
出口にて
けいせいの賢なるハ
此柳哉
其角

嶋原傾城町は朱雀野にあり此所上古は鴻臚館の地なり中頃は観喜寿院の封境にして西口の畠は宮城堂の口といふ又傾城郭は万里小路今の柳の馬場なり二條の南方二町なり其先は東山殿義政公遊宴の地なり天正十七年京二郎左衛門林又一郎といふ浪人上許によりて傾城町を免許せられ一の郭をひらきしなり地名を新屋敷と號し又柳の雙樹ありし故柳町とも称す今の出口の柳は其遺なり也其より十二年を歴て慶長七年に六條へうつされ今の室町新町西洞院五條橋通の南にて方弐町の郭之中に小路三通ありこれより三筋町と號す六條通今の魚棚なり西洞院川にかゝる石橋は傾城町の入口にして此所より初し之今にあり又其辺町又条の南西側醞匠の居宅異風あり此時の忘八にして今に存せり又寛永十八年に今の朱雀野へ移さる嶋原と號る事くは其頃肥前の嶋原に天草四郎といふもの一揆を起し動乱に及ぶ此里もうつされて騒しかりしかば世の人嶋原と異名をつけしより遂に此所の名とせり

...-bashige Take-
hara, ...pl.

Rokuemon Nagashima,
Engraver

"Views of Kioto and suburbs"
Printed by Tesuke Kawauchiya
Kyoto, 1624-1643.

Vol. 2 of an incomplete
set- [Vols 2-6 (two copies of Vol. 6)
and Vol 2 of a supplement
to this work.]